



羣書一覽

五





群書一覽卷之五

類題類

類題和歌集

三十一卷

此書目字がハ勅撰類題和歌集とむし〜全部十六卷とす刊也
 八第一卷より第五卷まで春部第六卷より第八卷まで夏部第九
 卷より第十三卷まで秋部第十四卷より第十六卷まで冬部第十
 七卷より第二十二卷まで恋部第二十三卷より第三十卷まで雜
 部外に公事部一卷附〜物計三十一卷とす○は水尾沈也室
 年中諸臣の勅〜今古に類被撰纂之〜めて被と号し
 たかひ上王公の製藻〜下諸氏の吟稿の〜を以て被りぬ
 ナれ〜を載せられた〜書中歌の〜を以て被りぬ
 けり〜今これ被考つ〜書よのせ〜被りぬ一萬二千
 餘の内歌〜被の闕〜もの千七百餘し今これ〜



このあつたさ用のちし

残林拾葉集 写本 一卷

勅撰の勅の願ののりぬらふのいふにふくむるに
作者ハ山本紀内源道春と云ふなり○元禄十二年季秋並河良
弼傳良父真字の跋るる残林拾葉ハ三友互山山本君の所と
すといふなり凡和歌二千二百餘首の著題の中ハ最難
このなり 後水尾帝嘗て當時の名卿は勅して廣く著題
歌如採各門の部叙するハ中惟其題は存しと云ふは歌如
の之公卿は勅しと云ふは日補ハ後書近室中ハ
類題和歌集と賜一姓惟二三血臣の家は傳く民間は
と云ふは其書の謄写すに君の家亦るの書は
公は其書は謄写すに君の家亦るの書は
と云ふは其書の謄写すに君の家亦るの書は
飲蘭ものとおしと云ふは其書の謄写すに君の家亦るの書は

明題和歌全集

十五卷

今川了俊の作なり古字ハ六卷なりハ二八明題と号す今集
以ハ十六代の集はのりぬらふのいふにふくむるに
今川了俊の作なり古字ハ六卷なりハ二八明題と号す今集
以ハ十六代の集はのりぬらふのいふにふくむるに
今川了俊の作なり古字ハ六卷なりハ二八明題と号す今集
以ハ十六代の集はのりぬらふのいふにふくむるに

續五明題和歌集 写本 六卷

一かみ撰者とも云ふ一かみは氏親撰とも云ふなりハ書ハ二十代
集ハ中ハ風雅集 新千載集 新拾遺集 新後拾遺
集 新續古今集 以上五部の集の歌はのりぬらふのいふに
ふくむるに
一かみ撰者とも云ふ一かみは氏親撰とも云ふなりハ書ハ二十代
集ハ中ハ風雅集 新千載集 新拾遺集 新後拾遺
集 新續古今集 以上五部の集の歌はのりぬらふのいふに
ふくむるに

題林抄 写本

二十六卷

為景 惟庸コトツキ其餘數十人カケル

新續題林和歌集 十六卷

新題林以後の歌子保千首寛延千首等け致しと云ふは
と云ふは、あつた、と云ふは、奥書よらん、と云ふは、作者の靈元院 実隆
為村 宗家 光栄 光綱 為久 竟恭親王 職仁親王 公福 公野
通夏 重季 実積 光胤 家仁親王 通躬 重豊 為恭 先祖
資持ツグモト等ト、雜の部の末は、大音オホネ今の歌名所の歌等、附
く、明和元年、と云ふ

部類現象和歌集 十六卷 伯水堂梅風

此書ハ勅撰類題の體タイより、新題林時代より、なほ、と云ふ、
の集、と云ふ、は、歌、あつた、と云ふ、は、年月と所、酒と、と云ふ、卷末は、
梅風の跋ハクあり

撰玉類題和歌集 十六卷 六本

此書ハ部類現象の誤アヤマリと云ふ、關ツケ、補ホひら、と云ふ、と刪カ、

と云ふ、は、撰玉の字、何、と云ふ、は、澄月の序、と云ふ、
寛政年中、有賀長收カキセイ校キョウ正セイす

袖中證歌集 十六卷 二本

二十一代集ニジュウイチダイシツ六家集ロクカシツ三玉集サンジュシツ其餘家集コノノカシツ歌合カガヒの、就ツキ、題テイ、と云ふ、一首の
澄スミ竹タケ、奉ホウ、袖珍スデヂン、と云ふ、元禄十七ゲンロクジュウシチ、二月上、本、十、撰者センシャ、つ、と云ふ、
ら、ず、自序ジキョあり

百家類葉 二卷 富士谷成壽

此書新類歌時代の、と云ふ、は、法ホウ、の、と云ふ、は、
の、と云ふ、は、卷首、撰者の自序ジキョあり

古今和歌集類題 一卷 松井幸隆

古今集の歌、と云ふ、は、
秋の、と云ふ、は、
夫木集、と云ふ、は、
歌合の、と云ふ、は、

類題證歌集 写本

八卷

同上

勅撰集私撰集諸家集歌合物語言對等より禁裏仙洞序
今廣秋諸家抄本ありて其數百部の書ありて博く証
の類採りけりやこれに一首採りて一首採りて一首採りて
其歌の多し即ちこれに文字の多し其の一首五首といふ
なりといふこれにのせりといふ假名遣句は句歌ありて
みれば名歌もあはれりといふ思眼のなづかうりて
これにふむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
りけり當時よりして一歌一そのことありていふむむむむ
老しむむむむむむむむむむ其歌のおねは同志の歌といふ
むむ勅撰歌むむむむむむむむむむ考索は伝はるるありて
このなり

草菴和歌集類題

六卷 一本

禎阿はの草菴集後ま房集のうね合せくれ歌といふ巻末
句歌ありて大社まふむむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむ家集の外はうねのせり袖珍むむむむむむむむむむむむ
又言子のむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
草菴集類題拾遺 一卷

李花和歌集類題 写本 二卷

李花集ハ南約の宗良親王の家集なり今集外の歌あり
ひく集ありてこれに十の南約五百番歌合附すけ歌合の
判者宗良親王といふことありてこれに十の南約五百番
かゝり實のやむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

芳雲和歌集類題 六卷 一本

け集のケルよういれ意のつて飲もカレとい難れの中も
收りしものし〇拾芥が新古今抄よりいふえ久し四月彼行竟寧
まいついし頃の進せられ 教し

厚顔抄

写本

三卷

沙門契冲

巻首より日本紀和歌畧註とありて此書ハ契冲 西山公の令より
りり日本紀の中れ和歌童謡等長短百二十七首抄しこれ小
ては一カべい古事記の歌百七首ハ中五十一首八日抄し
これものし五十六首抄しこれハ献す日本紀和歌畧註
上下古事記和歌畧註一巻勅しこれハ三巻とす此書ハ厚顔
おし名めしし元祿四年八月漢文の自序ありしり〇契冲
門人今井似岡が萬葉緯より明月記二十九建永二年九月廿日
昭付家長進日本紀歌註より望申法橋より不知其由日本紀
者我朝之國史尤可重若可其沙汰者大臣公卿官外記を可奉
行歟非法師撰進之仁歟 廿三日頭昭昇綱所より今案下り

紀記歌集

二卷

惜哉頭昭の日本書紀の歌の註今世傳より釋日本紀
公望等が私記引くこれヲ註すしりも 語認りしり
しり懐賢のしり此の歌の註取んしり釋の中よ某の曰
す悟りしりしり密乘のしり契冲の日本書紀よりいふ
記の歌の註厚顔抄三巻抄す困り盡頭なりいふ傍字と
いふしり神代巻の歌百首人皇紀の歌百二十首凡て百二十六
首連歌二首なり

の左は傍書すハ一役... 学者の好むところ... 下巻を
古の紀の終の日本紀を出して... 〇天明八年秋諸君
これの自序同年八月大紅魚足直喜の跋あり

日本紀歌解

二卷 宇治五十槻

日本紀の... 〇天明八年秋諸君
大紅魚足直喜の跋あり

續日本後紀歌解

一卷 同上

和書の外題は概の... 幸直の序... 〇天明八年秋諸君
大紅魚足直喜の跋あり

僧徒のたて... 長歌ハ... 〇天明八年秋諸君
大紅魚足直喜の跋あり

の國人田内秀真... 〇天明八年秋諸君
大紅魚足直喜の跋あり

萬葉緯... 〇天明八年秋諸君
大紅魚足直喜の跋あり

〇天明八年秋諸君
大紅魚足直喜の跋あり

〇天明八年秋諸君
大紅魚足直喜の跋あり

〇天明八年秋諸君
大紅魚足直喜の跋あり

〇天明八年秋諸君
大紅魚足直喜の跋あり

竹取翁歌解

一卷 同上

萬葉集第... 〇天明八年秋諸君
大紅魚足直喜の跋あり

群書類

十六

りしめしりし書おろしりし今神主助備の跋よきせり。寛政
十二年四月攝經亮のてりし。一万余葉集の中より竹取の巻のてりし。ハ
今の中よりしりし。これりし。奥沖けの真淵の巻のてりし。はな
りし。もかきりし。これりし。きれりし。かきりし。これりし。えぬと
りし。はなすき。

撰歌類

三十六人撰

一卷

一名三十六歌仙より四條大御言公任つりし。よき。六条。又。具
平親もと和哥のりし。御流せり。これりし。よき。これりし。これりし。
ハ歌仙といふ。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。
これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。
て一首ハ貫之の撰なりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。
これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。
今よりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。これりし。
人丸 躬恒 素性 法成 遠見 大夫 家持 業平 兼輔
敦忠 公忠 兼行 兼盛 貫之 伊勢 赤人 遍
小大君

群書類

和書部五

十六

君

十

昭 順 元 輔 朝 忠 高 光 友 則 小 西 忠 岑 賴
基 多 信 明 元 真 中 文 忠 見 中 務 中 務

後

刑部 範 兼 公 任 相 摸 泉 式 部 十 首 伊 勢 大 輔 友 系 忠 房 菅 原 彌 昭 大 江 匡 衡 安 法

後 刑部 範 兼 公 任 相 摸 泉 式 部 十 首 伊 勢 大 輔 友 系 忠 房 菅 原 彌 昭 大 江 匡 衡 安 法

新三十六歌仙

一卷

在原元方 輔親 高遠 馬内侍 友系 義孝 兼式部 道綱 母 友系 長緒 定礼 上東内院中將 兼覽王 在 系 棟梁 文屋 康秀 友系 忠房 菅原 彌昭 大江 匡衡 安法 法師 清少 納言

撰者 元方 輔親 高遠 馬内侍 友系 義孝 兼式部 道綱 母 友系 長緒 定礼 上東内院中將 兼覽王 在 系 棟梁 文屋 康秀 友系 忠房 菅原 彌昭 大江 匡衡 安法 法師 清少 納言

和書部五

十八

隆祐^{カフスケ}朝臣 左近將領の具親^{モトノサカ}朝臣 左但馬守源家長朝臣 鴨長明^{カモナガノ} 右京秀実 以上各十首あり 右一名朝孫傳之三十六首あり

中古三十六歌仙 一卷

撰者いづれもつぎひしりつぎとすもた右のつぎ
 阿中御言定家 右多岐守源朝臣 皇太后入大夫俊成 寂蓮^{シヅナ}河内
 六条前大臣 藤原基俊 源三位朝政 中大夫信実 意鏡
 法隆^{ハツナガ}院^{イノ} 鴨長明 大藏^{オホクラ}の頭 眞秘^{マキヒ}河内丹後 皇太后入大
 夫俊成^{ハシラヒ}女^メ 西行^{セウキョウ}河内 后久我^{ノミ}河内 后二位源隆 大御言通
 具^{ツグ} 后京秀実 式子内親王 崇徳院所製 信光^{シノヒカル}河内入内大臣 宗良
 太政大臣 二条院隆成 左大臣多岐守 源信光朝臣 正行^{マサユキ}左大臣
 西園寺入内大臣 后久我河内 八条院^{ヤチノヘ}の余 小侍^{コウジ}信大御言通
 以上各一首

新三十六人撰歌仙 一卷

撰者いづれもつぎひしりつぎとすも前の新三十六人撰と同一代者あり
 阿中御言定家 式子内親王 土御門源朝臣 皇太后入大夫俊成 女
 順徳院所製 右内大臣 仁和寺 右大臣朝臣言定 九条院所製
 白太政大臣 土御門内大臣 右京将領河内 后久我河内 中大夫信実 意鏡
 西園寺入道河内 后久我河内 大御言通 河内 左大臣多岐守 右京秀実
 隆 系後雅行 二条院隆成 右大臣源朝臣 源隆祐朝臣 大藏^{オホクラ}の頭
 源具親朝臣 右多岐守源朝臣 右京秀実 河内 寂蓮河内 俊成河内
 皇太后入大夫俊成河内 西行河内

女房三十六人歌仙 一卷

撰者詳しきうたあり 各一首あり 河内 右京秀実 河内 中大夫羽島 即ち右
 應安六年長月十旬に此以心をて書す 大中大夫羽島 即ち右

和書部五

才四卷 新女歌仙 才五卷 後女歌仙 才六卷 職人歌仙

集外歌仙

一卷

平常綴 東野州 津守國冬
 宗碩 月村命 永閑 能登
 道灌 大田 長慶 之好 宗養
 昌俊 佐川 尚證 惣社 長嘯 東山 宗祇 種玉房 心敬 比叡 山住 宗長
 基佐 橋井 肖柏 牡丹花 親當 蟻川 冬康 之好 紹巴 比叡 山住 宗長
 玄音 細川 心前 元就 毛利 氏康 北条 晴信 吉田 氏政 北条
 氏真 今川 昌叱 里村 政一 小堀 貞徳 道灌
 者也 寛文五年二月下旬交野内近匠之院所次之令
 野蓮長被製畫圖与各合符年
 職人歌仙 一卷 烏丸光廣卿

医 陰陽 佛 經 綴 治 番 匠 刀磨
 漆 巫女 盲目 珠 壁 塗 什 掛 女 大 京 人 大 人
 海士人 是足屋 糸心 皮心 縫心 笠心 桶 法 新 打
 筆 結 扇 屋 彫 物 心 綾 心 笠 心 桶 法 新 打
 船人 己上哥一首 乃ハ二首

三十六貝歌仙 写本 一卷

忘貝 木小貝 梅花貝
 貝 己れ一くまに貝 規貝 片貝 抱貝 貝
 貝 瞿麦貝 けり貝 小貝 船貝 筵貝 裏貝 花
 殘貝 まるをの小貝 千種貝 海松貝 松貝 鳥貝 雀貝
 都貝 宝螺貝 了や貝 浪前拍貝 くれ貝 塩貝
 の貝 へ世貝 くれ貝 袖貝 以上とあり一首

歌仙金玉抄 二卷

和書部五

三十一

君言一覽

歌の法式歌学最要のしども何れもせれまう巻の序の

一 正義部 六義 序代 短歌 反歌 旋風 混本

二 折句 皆冠 姓名 贈答 連歌 八病 歌合 今

作者 清書 採集 歌合 歌今 書様 題 判者 序者

三 上 枝葉部 天象 竹節 地儀 居處 衣

同下 木鳥 獸虫 魚人倫 人 衣食 雜也 又

四 言語部 世俗言 由緒言 料言

五 名所部 山嶺 社林 河社 社 寺

六 用意部 山嶺 社林 河社 社 寺

奥儀抄 寛元元年刻 三卷 四本 藤原清輔

奥儀抄

三卷 四本 藤原清輔

刊中らひハ八巻よふり和歌此式万系古今集等和歌の奥儀

と釋す歌道至要のまうとて五家髓の一なり法補ハ河

集の採者くく法補の子孫所法何のえなり一書は法補

前和歌得業生柿本躬貫採と作名何あせり○五家

髓照ハハヤの所抄は新採髓極公任 終因歌枕 佐和子

仲実詩語抄 清浦奥儀抄とてとて又四家の髓照 佐和子

名抄又傳秘抄と号す 綺語抄 奥儀抄 童蒙抄とありとせり

卷之上 六義 六體 三種作 八不 冬句 連句 隠黙

卷之中 拾遺歌 拾遺歌 拾遺歌 拾遺歌 拾遺歌

卷之下 古今和歌の序 奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

奥儀抄とありとせり

和書部五

二十五

和歌初学抄

故実の帳の方札の和歌のたのむるものごとくしるすも御抄

和歌初学抄

四卷 目上

巻一 古歌詞 万葉集の詞を一首より二十までしるす
長経と百五十までしるす所のせりしは古今集の詞の餘
ね標於遺ね標遺いせむ位大ね標の白れしを抄あけり

巻二 由緒詞 秀句 天をきて八月日星をえん系らるる川
の舟船をせてハ帆櫓くひくればくぐさすくちのれをわ
縁にせしむるあけり 似詞 赤ハ玉をさし似 ちち
むりやえのれらるるあけり 必次詞 まりしものれし

巻之三 喻来物 くらりしものれをわねて 萬の毛衣つらね
あけりすしり抄よりあけり 物志 日さらり抄に
りし抄に せしむるものれをわねて 萬の毛衣つらね

巻之四 所名 山園京園二井雜木 万葉集あはる
後名あはる あらるるのりし系 曾らるるのらるる
らにせしむる

巻五 兩所詠歌 一首 兩所詠歌 實文二の刻

清輔雜談集

二卷 四甲

袋よりあけらるるものを實文真のあはるるものごとくしるすも
かきつらるるの抄ひくひあはるるをさしむるものれをわねて
は抄者つづいりしをさしむるものれをわねて

袖抄

二十卷 釋顯昭

太秦の躰昭の他し万葉集古今集より 抄りしを時代
までしるすの河乃み細りしものれをわねて

和書部五

三十一

三十六

めて金葉千載句集の... 〇書の他者久しく
これ何れか... 〇書の他者久しく
慈法和尚の... 〇書の他者久しく
和歌集の中... 〇書の他者久しく
ひたす慈法和尚の... 〇書の他者久しく

新撰髓腦

一巻 大納言公任
今此病の... 〇書の他者久しく
いも何れか... 〇書の他者久しく
納言公任... 〇書の他者久しく

古語深秘抄

十卷
歌学の書十九種... 〇書の他者久しく
いも何れか... 〇書の他者久しく
いも何れか... 〇書の他者久しく

いも何れか... 〇書の他者久しく
いも何れか... 〇書の他者久しく
いも何れか... 〇書の他者久しく

歌経標式 喜撰和歌式 孫姫和歌式 石見女式
十四式八名月... 〇書の他者久しく

秘藏抄 三卷 躬恒作
古... 〇書の他者久しく

古... 〇書の他者久しく
古... 〇書の他者久しく
古... 〇書の他者久しく

新撰髓腦 一巻 公任卿
莫傳抄 一巻 信光

草本... 〇書の他者久しく
草本... 〇書の他者久しく
草本... 〇書の他者久しく

和歌肝要 一巻 信成
和歌諸作四病八病... 〇書の他者久しく

和歌口傳

三十九

後鳥羽院御口傳 一卷

和歌の至要松七ヶ条ありけりやなまうにほえり十二月教念止
所持侍震子の和歌の字子すりの奥ちあり又宮内少輔
の奥ちあり

和歌式 一卷 定家

和歌の式は信俊に補法補基俊成未
の和歌を奉りて長三子の奥ちあり兼内融
又の奥ちあり

正風體抄 一卷 同上

千載抄抄撰信俊の和歌の正風體の字なり
兼内融の和歌の字なり

和歌庭訓 一卷 同上

一名毎月おしりし巻首は毎月の和歌の字なり
りいぬしを刊定家衣笠内大長の子なり

和歌口傳 一卷 家隆

建武四年の和歌の字なり又文明六年三月は通考の奥ちあり
和歌の字なり

近來風體抄 一卷 良基公

和歌の字なり

瑩玉集 一卷 鴨長明

序は凡作和歌の字なり又瑩玉集の序は
母の忘る実病侍の和歌の字なり

歌河上 一卷 舟入

和歌の字なり又歌河上の和歌の字なり
和歌の字なり

八雲口傳 一卷 舟家

和書部五

三十九

一名和歌一冊と号す和歌のそけい九百十作のり制の和のり
古く和歌のりか和歌のりせり和歌のりは先人の和歌のりは
のりは和歌のりは和歌のりは和歌のりは和歌のりは

阿佛

耕雲口傳 一卷
貞治三年二月廿四日傳し即以依自筆令と号す

和歌六部抄 六卷
和歌六部抄 六卷

桂明抄 一卷
貞元考

桂明抄 二日月夕月夜上注月日月 不知和月立注月日
月即待月廿日月下注月日月明月おのり

桂明抄と名づく又安五子の奥書といく此小冊室所友の作
八雲一言記 一卷

和歌二言集 一卷
和歌二言集 一卷

和歌用意条 一卷
和歌用意条 一卷

和歌六部抄 六卷
和歌六部抄 六卷

和歌式 定家卿 正風体抄 同上 和歌庭訓 同上
 八雲口傳 為家卿 和歌口傳 家隆 近來風体 同上

詠歌大概 一巻 定家卿

己上六部各一巻とよその古語係成柳の中よりよき歌
 歌加詠下らんわれおほいひのほろり〜くはるぬは才七の所子
 槐井くふう快は院主よとせと〜ちか〜〜 頃河の御
 〇〇〇〇奥よ秀歌伴大畧百餘首とのすゝめく 他者柳公純

詠歌大概抄 二巻 二本 細川幽齋

玄音法下れはし眞書うろろ我五相は柳海なるこの〜作
 ら〜〜〜はる〜〜〜〜の〜〜〜の〜〜
 く〜〜〜はる〜〜〜〜の〜〜〜の〜〜
 の〜〜〜はる〜〜〜〜の〜〜〜の〜〜
 め二冊の〜はる〜〜〜の〜〜〜の〜〜

未来記 雨中吟 一巻 定家卿

定家卿のク四季恋とあて十首〜〜の〜前和歌得業生柿本貫
 躬〜〜他名〜〜〜書成未来記〜〜行〜〜
 乃〜〜致と詠す〜〜〜長〜〜
 又〜〜〜〜た〜〜〜
 又〜〜〜〜た〜〜〜
 又〜〜〜〜た〜〜〜
 又〜〜〜〜た〜〜〜
 又〜〜〜〜た〜〜〜
 又〜〜〜〜た〜〜〜
 又〜〜〜〜た〜〜〜
 又〜〜〜〜た〜〜〜
 又〜〜〜〜た〜〜〜

宗祇進齋の古抄と般若齋の増記より貞正の説は多く卷り

和歌七部抄

八巻

詠歌大概 一卷 秀歌大略 二巻 百人一首 二巻 未來記 兩中吟 二巻
 三体和歌 一卷 結題百首 一卷 定家の巻りろく 承應元年十月刻

兼元抄

一卷 定家卿

卷首より一人一人の言のまじりたるをいひては
 おろかなんよまのまよひをさたすたるをいひては
 ちやんもなれたるをいひては
 ちやんもなれたるをいひては
 ちやんもなれたるをいひては
 ちやんもなれたるをいひては
 ちやんもなれたるをいひては
 ちやんもなれたるをいひては
 ちやんもなれたるをいひては

定家物語

一卷

初にそ積潤のゆきまは万葉古今管家万葉ホのり奥とて
 以京極中御言入たるゆりちち子本ア概しくお秀を立判

三五記

二巻

柳を初末と二巻よめててうのの序あり
 上巻 歌の御のり 十神入これ御のり 三十八仰り

下巻 日記のゆき 菅冠のり 親白跡句のり 建保五年九月
 定家の他よりゆきも御のり

愚秘書

二巻

これ八巻中初末と二巻よめてて

和書一覽

近きものうは風中相遠のうきもむらりのうきも病
めあり何割の何月ゆづりしうのうきもむらりのうきも
奥まきし此一卷道く教多美他くり書道追松田丹野者
やまき嘉慶元年三月十二日信普慈園抄改定准三后序料

和歌魚底抄

十卷 藤原基俊

一名一子傳より四季鳥雜の歌などありしうきもむらりのうきも
奥書并起法久等書屋よあり

無名抄

二卷 鴨長明

後相基俊よりなりしうきも其外長明時代のうきも雜法
とありしうきも老澄よりなりしうきも

竹園抄

一卷

お雇ひ小童の時の他しうきも氏姓つ入りのうきも

蒙求和歌

十四卷 二本 源光行

李翰が蒙求れりしうきも百五十條の故事やめきりしうきも和歌
てこれ何澤しうきも標題より四季鳥雜のうきも題や配
しうきもくろくありしうきも漢祖龍顔より立春のうきも
はて丁固生松より子日の松ありしうきも○卷首は源光行の自序
もて元久甲子之歲初秋壬申之日朝議大夫源光行しうきも
よりしうきも何れ序よりしうきもこれ枝葉拾葉よありしうきも

井蛙抄

六卷 頓阿法師

頓阿のうきも大納言お世卿のうきも何れありしうきも
のうきもこれ考りしうきもこれ雜法ありしうきも
家々模範しうきも○鳥丸資業のうきも井蛙抄
愚問ありしうきも○光榮のうきも井蛙抄
糸家れしうきも

和書一覽 和書部五

三十六

藻鹽草 二十卷 月村齋宗碩
藻鹽草 二十卷 月村齋宗碩
藻鹽草 二十卷 月村齋宗碩

續藻鹽草 字本 十卷
續藻鹽草 字本 十卷
續藻鹽草 字本 十卷

宗碩のり 後まよなるり 部 萬葉集の句 宗碩のり
宗碩のり 後まよなるり 部 萬葉集の句 宗碩のり

東野州聞書 一卷 五本
東野州聞書 一卷 五本
東野州聞書 一卷 五本

幽齋聞書 二卷
幽齋聞書 二卷
幽齋聞書 二卷

和書一覽

心徹ハ法嚴和尚ノ号ニシテ東福寺ノ書記ナリ
稱テ定家ノ執事トシテ人々ノ書ハ心徹トシテ
ハ十人ノ一ニシテ其外ノ何ノ松後備前侯ノ御
松後備前侯ノ御書ハ心徹トシテ二冊トシテ
心徹ノ天明中ニ再刻ノ中ノ今後ノ心徹ノ有賀也
心徹ノ御書ハ心徹トシテ

敬心ノ巻 二卷

和書連テハ心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ

歌林撲撒 七卷 松永貞徳

法補ノ遺傳抄ノ重抄ノ松永貞徳ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ

古今ノ案ノ記ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ

歌林雑話 二卷 同上

一名身代ノ遺傳抄ノ松永貞徳ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ

二根集 一卷

和書ハ心徹トシテ九月一日ノ系西大御言ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ
心徹ノ御書ハ心徹トシテ

和書一覽 和書部五

群書一覽

万葉集もなほこれ中の一ありあ。いふは、
わいらはのた方にあつて、
集西冊昌珍老の所被抄書也和歌之秘註此道之至宝
不可出窓外者也今以兩本合校合年 花雪軒

耳底記 一卷

細川玄旨法皇御孫也松島丸を度つて、
なり。○湯島寺に口授つて、
の時の字をかくし、
の時の字をかくし、
の時の字をかくし、

春雨抄 十卷 二十本 鱸重常

和今連歌ホの詞抄は、
は書りしより連歌者流の、
多くのせり寛永中、

和歌題林抄 二卷

四季恋雜の題の、
あし、
し、
近きせよ、
春夏秋の、
秋者、

増補和歌題林抄 十一卷

は書ハ二卷の、
る、
と、
と、

群書一覽 和書部五

掌中題林抄

一卷

尾崎雅嘉

種心秘要抄

八卷

此書ハ秘本抄のともにも... 一字御抄 天地山海より多獸虫魚オホい

百題拾葉

八卷

古今類句

三十四卷 山本春心

新和歌類句集

百卷

二十一代集伊勢物作大和物作... 五句より

群書一覽

和書部五

四十二

古今和歌集の五句より五句まで
の句をとりしむるを五句集と云ふ
編者不明

夫木抄類句 三十卷

夫木抄の古今和歌集の例にあつて
草菴集類句 四卷

春の句の古今和歌集の例にあつて
五句類葉集 三卷
松枝子春

二十一代集の家集大和歌集の例にあつて
五句の例の古今和歌集の例にあつて
字の例の古今和歌集の例にあつて

類葉和歌集 六卷

和歌集の例の古今和歌集の例にあつて
藏玉和歌集 一卷

草菴集の例の古今和歌集の例にあつて
此一卷者自註の例の古今和歌集の例にあつて
各抄の例の古今和歌集の例にあつて

吳竹集 十卷

和歌集の例の古今和歌集の例にあつて
和歌集の例の古今和歌集の例にあつて

和歌集の例の古今和歌集の例にあつて
和歌集の例の古今和歌集の例にあつて

群書一覽

四十一

わうれてはのゆかすは卷よめて傳へたるものありしや
 奥あつては右條に千金莫傳なりといふなりでハハハハハ
 き元龜元手庚午菊月廿五日信秀本刑部少輔信秀在
 判龍本寺殿姉小路の所伝く淳恵〇才二省より才十二巻とい
 うものありしに奥あつてあるは才十二巻の奥あつて
 此一冊常明と傳へた祐海は下被寄附内文の友者やともわら

春樹顯秘抄 写本 一卷

は書ハ姉小路式部よりしてしてはのゆか考へてつたなり
 やしきなりといふゆか人をさしやさしりゆかつてつたものありし
 梅沢秘くかけりてつたなりは大概おのりつてつたもの
 くてつたハ出葉とつたなりは本あつたなりといふもの
 のゆかつたなりは和利のつたなりはつたものありし
 たる今もつた本のもつたなりはつたなりはつたものありし

こりつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 ちりつ

飛鳥井家式法 写本 一卷

和歌のゆかつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 和歌總食宴私記 写本 一卷 姉小路実紀朝臣

此書ハ公宴和歌所令け式法は傲りてつたなりはつたものありし
 定たるなりはつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 たりつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 の書式はつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 括あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 物ある子孫のやつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 物ある子孫のやつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

漢雲問答 写本 一卷

群書一覽 和書部五 四十六

和歌集

中院通致らぬ歩はは門人お井や津のき化せしき

歌林飛彈工 写本 一卷

通致らぬ歩はは門人のきくね十方ふし一舞は直代も

詞林拾葉 写本 一卷

此書ハ武者小治実陸る者川のしも門人似や竹のき
り似やの故にらるれ武者小治俊同く実陸る此札は
しるはひのしるはひのしるはひのしるはひのしるはひ
はははははははははははははははははははははは
つさ月御しるはひははははははははははははははは
ゆりくられ井の流さるるくくくくくくくくくくくく
ちうりあまごねらる中のたまさかハさす身しむしの作
とすれぬさるるちるるるるるるるるるるるるるるるる

聴玉集 写本 一卷

鳥丸光榮公のしり松松門人某のすまかり近體のうた
の模範すすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす

梨木集 一巻 五本 梨木茂睡

近體のうた小點のうたよもよもよもよもよもよもよも
うまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうま
ままま

和歌伊勢海 二卷

伊書後^イおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
伊馬^イ糸よいせおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
貝^イやひりんおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
孫^イ自ち^イ直^イ何^イの^イ序^イま^イま^イま^イま^イま^イま^イま^イま^イま^イ
一二の巻ハ^イ鳴^イ仙^イは^イ名^イふ^イろ^イそ^イ異^イて^イ西^イ國^イ何^イ作^イる^イ人^イ一^イ也^イ 信^イ實^イ欽^イ

和歌部五

四十二

信の子 和信は秋令 二曙二夕の秋 飛鳥丹稚章の古筆に
集外私伝 秋のそら 紙経冊書法 折紙の経冊の
才とのかさハ 海子相伝の巻 紙経冊書法 折紙の経冊の
の十國 屏風押紙の法 紙の巻とせう 十國の巻とせう
天の十手 八月夜小傳 秋の巻とせう

渚の玉 五卷

くわ 信のび 八ひろい 二つ 了る ちさく 法のわ じよ
もとの 信のび 八ひろい 二つ 了る ちさく 法のわ じよ
之詠 七喻 十如曼 二十八の いらは 平七そ 採り合
曙夕暮百首 大社も何とそ 一の 一の 一の 一の 一の 一の
此書ハ 二體 二夕 四季 四隅 五行 五二 八景 十如曼

鴨の羽拾 二卷

十二月花多 廿一代集卷の巻軸 九十四賀の 一の
一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の 一の

柏傳 一卷

野田忠甫

わがしとめてが 柏のしとめてが 柏のしとめてが 柏のしとめてが
のしとめてが 柏のしとめてが 柏のしとめてが 柏のしとめてが
てこれとせやう 柏のしとめてが 柏のしとめてが 柏のしとめてが
とせやう 柏のしとめてが 柏のしとめてが 柏のしとめてが

歌囊井蛙談 三卷

百菴言満

歌袋のしとめてが 大木おとく 柏のしとめてが 柏のしとめてが
のしとめてが 柏のしとめてが 柏のしとめてが 柏のしとめてが
てこれとせやう 柏のしとめてが 柏のしとめてが 柏のしとめてが
とせやう 柏のしとめてが 柏のしとめてが 柏のしとめてが

歌林記識編 同上

同上

和書部五

四十八

古今和歌集の巻の目録に於ては、
 近世法に依りて、
 卷之七 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九 和歌の白 諸おのほおし
 卷之十 和歌の白 諸おのほおし
 卷之十一 和歌の白 諸おのほおし
 卷之十二 和歌の白 諸おのほおし
 卷之十三 和歌の白 諸おのほおし
 卷之十四 和歌の白 諸おのほおし
 卷之十五 和歌の白 諸おのほおし
 卷之十六 和歌の白 諸おのほおし
 卷之十七 和歌の白 諸おのほおし
 卷之十八 和歌の白 諸おのほおし
 卷之十九 和歌の白 諸おのほおし
 卷之二十 和歌の白 諸おのほおし
 卷之二十一 和歌の白 諸おのほおし
 卷之二十二 和歌の白 諸おのほおし
 卷之二十三 和歌の白 諸おのほおし
 卷之二十四 和歌の白 諸おのほおし
 卷之二十五 和歌の白 諸おのほおし
 卷之二十六 和歌の白 諸おのほおし
 卷之二十七 和歌の白 諸おのほおし
 卷之二十八 和歌の白 諸おのほおし
 卷之二十九 和歌の白 諸おのほおし
 卷之三十 和歌の白 諸おのほおし
 卷之三十一 和歌の白 諸おのほおし
 卷之三十二 和歌の白 諸おのほおし
 卷之三十三 和歌の白 諸おのほおし
 卷之三十四 和歌の白 諸おのほおし
 卷之三十五 和歌の白 諸おのほおし
 卷之三十六 和歌の白 諸おのほおし
 卷之三十七 和歌の白 諸おのほおし
 卷之三十八 和歌の白 諸おのほおし
 卷之三十九 和歌の白 諸おのほおし
 卷之四十 和歌の白 諸おのほおし
 卷之四十一 和歌の白 諸おのほおし
 卷之四十二 和歌の白 諸おのほおし
 卷之四十三 和歌の白 諸おのほおし
 卷之四十四 和歌の白 諸おのほおし
 卷之四十五 和歌の白 諸おのほおし
 卷之四十六 和歌の白 諸おのほおし
 卷之四十七 和歌の白 諸おのほおし
 卷之四十八 和歌の白 諸おのほおし
 卷之四十九 和歌の白 諸おのほおし
 卷之五十 和歌の白 諸おのほおし
 卷之五十一 和歌の白 諸おのほおし
 卷之五十二 和歌の白 諸おのほおし
 卷之五十三 和歌の白 諸おのほおし
 卷之五十四 和歌の白 諸おのほおし
 卷之五十五 和歌の白 諸おのほおし
 卷之五十六 和歌の白 諸おのほおし
 卷之五十七 和歌の白 諸おのほおし
 卷之五十八 和歌の白 諸おのほおし
 卷之五十九 和歌の白 諸おのほおし
 卷之六十 和歌の白 諸おのほおし
 卷之六十一 和歌の白 諸おのほおし
 卷之六十二 和歌の白 諸おのほおし
 卷之六十三 和歌の白 諸おのほおし
 卷之六十四 和歌の白 諸おのほおし
 卷之六十五 和歌の白 諸おのほおし
 卷之六十六 和歌の白 諸おのほおし
 卷之六十七 和歌の白 諸おのほおし
 卷之六十八 和歌の白 諸おのほおし
 卷之六十九 和歌の白 諸おのほおし
 卷之七十 和歌の白 諸おのほおし
 卷之七十一 和歌の白 諸おのほおし
 卷之七十二 和歌の白 諸おのほおし
 卷之七十三 和歌の白 諸おのほおし
 卷之七十四 和歌の白 諸おのほおし
 卷之七十五 和歌の白 諸おのほおし
 卷之七十六 和歌の白 諸おのほおし
 卷之七十七 和歌の白 諸おのほおし
 卷之七十八 和歌の白 諸おのほおし
 卷之七十九 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八十 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八十一 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八十二 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八十三 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八十四 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八十五 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八十六 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八十七 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八十八 和歌の白 諸おのほおし
 卷之八十九 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九十 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九十一 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九十二 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九十三 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九十四 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九十五 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九十六 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九十七 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九十八 和歌の白 諸おのほおし
 卷之九十九 和歌の白 諸おのほおし
 卷之百 和歌の白 諸おのほおし

和歌八重垣 七卷 有賀長伯
 一三とれを 去嫌 とうは白 此は今ののり 白まのそなひ してんはの
 返りけり 難字のり 白まのそなひ してんはの
 才四巻より 才七巻より してんはの
 白つたよめ 白つたよめ してんはの

和歌二葉草 七卷 同上
 四本多難ふ部 白まのそなひ してんはの

初学和歌式 七卷 同上
 卷之一 とうは白 此は今ののり 白まのそなひ してんはの

卷之二 とうは白 此は今ののり 白まのそなひ してんはの
 卷之三 とうは白 此は今ののり 白まのそなひ してんはの
 卷之四 とうは白 此は今ののり 白まのそなひ してんはの
 卷之五 とうは白 此は今ののり 白まのそなひ してんはの
 卷之六 とうは白 此は今ののり 白まのそなひ してんはの
 卷之七 とうは白 此は今ののり 白まのそなひ してんはの

濱れ 二卷 同上
 四本多難各巻と してんはの

和歌分類 七卷 同上

和歌道

天象 地儀より 多敷草本よりしてきて 近侍けしるものあり
何れも 河原 河原よりしるものあり 河原 河原よりしるものあり
他者よりしるものあり

歌林雜木抄

六卷 同上

四季志の題部とてしるものあり 四季志の詞とてしるものあり

四季志の詞のありしるものあり 四季志の詞のありしるものあり

四季志の詞のありしるものあり 四季志の詞のありしるものあり

四季志の詞のありしるものあり 四季志の詞のありしるものあり

四季志の詞のありしるものあり 四季志の詞のありしるものあり

四季志の詞のありしるものあり 四季志の詞のありしるものあり

和歌麓の塵

三卷 同上

此書ハ四季志の題部ありしるものあり 四季志の詞のありしるものあり

四季志の詞のありしるものあり 四季志の詞のありしるものあり

四季志の詞のありしるものあり 四季志の詞のありしるものあり

寛政十三年上本す

和歌道

一卷

和歌道とてしるものあり 和歌道とてしるものあり

和歌道とてしるものあり 和歌道とてしるものあり

和歌道とてしるものあり 和歌道とてしるものあり

和歌道とてしるものあり 和歌道とてしるものあり

和歌道とてしるものあり 和歌道とてしるものあり

増補和歌道

九卷 河瀬菅雄

和歌道の道とてしるものあり 和歌道の道とてしるものあり

和歌道の道とてしるものあり 和歌道の道とてしるものあり

和歌道の道とてしるものあり 和歌道の道とてしるものあり

和歌道の道とてしるものあり 和歌道の道とてしるものあり

和歌道の道とてしるものあり 和歌道の道とてしるものあり

和歌道の道とてしるものあり 和歌道の道とてしるものあり

和書目部五

五十

此書ハ二十一代集ハ近體ノ一ハ内ノ一ヲヤクシテ
序内人稀懸大平序田中万保ノ後あり

玉のり 一卷 同上

此書ハ武陽ノ隱士遁危子トシテ
一巻 本居宣長

和歌童謡抄 一卷

此書ハ武陽ノ隱士遁危子トシテ
一巻 本居宣長

言葉の玉の緒 七卷 同上

此書ハ武陽ノ隱士遁危子トシテ
一巻 本居宣長

言葉の玉の緒 七卷 同上

此書ハ二十一代集ハ近體ノ一ハ内ノ一ヲヤクシテ
序内人稀懸大平序田中万保ノ後あり

玉のり 一卷 同上

此書ハ二十一代集ハ近體ノ一ハ内ノ一ヲヤクシテ
序内人稀懸大平序田中万保ノ後あり

つとゞ 虚泊のいであさひのいさしきくさるる
ナホぞ 〴〵にたまきく けりぐ 〴〵の相かり 〴〵書り川
とらけ 證歌と二十一代集のちこ 卷消し 例言のあけり
〴〵序と 寛政の酉の春有賀長收の後り 〴〵のいさす

和歌實踐集

五卷 同上

二十一代集のちりり 〴〵の四季恋雜の歌よ 〴〵あつ
〴〵の歌よ 〴〵の歌も 實踐のいさしき 〴〵の類歌集のいさしき
〴〵のす 卷末よ 〴〵のいさしき 〴〵のいさしき 〴〵のいさしき
〴〵のいさしき 〴〵のいさしき 〴〵のいさしき 〴〵のいさしき
寛政の辛亥のいさしき 〴〵のいさしき

濱

一卷 同上

天象 方位 地儀 居所 草木 鳥獸 人
器用 〴〵部 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の
〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の

和歌玉柏

二卷 度會常夏

二条家 和歌 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の
〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の

異名分類抄

四卷 入江昌吉

天時節 居所 器財 衣食 魚貝 鳥獸 土地
神祇 人倫 草木 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の
〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の

〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の
〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の
〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の
〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の

歌意考

一卷 賀茂真淵

〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の
〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の 〴〵の

河のづく万葉集の古今集乃令此の御詠一つこのま
らぶつ書ハ万葉集古今集に代は採集松遠をよとい
こつりへんごづりか古今今六帖採るごすり又採りあそ
鎌倉右大臣集ホの今世中仲らりもつりも採りあそ
るりへんごづり又古今集に今世の令律儀式ホのま
まかよつごるも採りあそ

ふ

一卷

小澤サニ菴

ふんりしごんか
しごのんはるるる
ふま 沈ま 未ま りるさ
の詞より二句之句四句五句和せ
明題部類抄 七卷
和奇但題の書

一首多れ
採伸家
とそ

増補和歌明題部類

二巻

尾崎雅嘉

此書ハ京中明記におかれあはれ
採へき
とそ
宝徳文明文和寛永
く當時
御歌

此組歌集何人の撰なりしは未詳一巻五首
七首十首二十首百首ありしものなるに
度のみよへは了り附割のたふ考を國に
てふあけり

和歌題辭要解

一卷 伴蒿蹊

四季忠雜の歌の解一やまのりしもの
ふくせはありしものなるに

枕詞燭明抄

二卷 下河邊長流

此書作者のなかりしものなるに
總釋のやま此書のしんく長流の
萬葉集時代より中なりしものなるに
りしものなるに

冠辭考

十卷 賀茂真淵

是の冠辭考しるは目録ありしものなるに
つくりし此書五音五十字を以て
しるは目録ありしものなるに
流の付つものなるに

冠辭考續貂

七卷 上田秋成

真淵の冠辭考しるは目録ありしものなるに
うけをとりしものなるに
詞草小苑

一卷 建涼山

詩文類

懷風藻

一卷 二本 淡海二船

皇^ノの^ノ集の權輿^トトシテ持者の名^ヲ有^ルル漢文の自序^ニ云淡海乃^ハ約^ク手都^ニ暨^テ凡^ソ一百二十篇勤^メて一卷^トナ^リ作者^ハ六十四人具^ニ姓^名附^シ題^ト并^ニヤク爵^里と^テ列^シて篇首^ニ冠^リしむ^ル時^ハ大平^勝室^ノ二年辛卯十一月○作者^ハ八卷首^ニ大友^{皇子}二首 河島^{皇子}一首 大津^{皇子}一首 紀^朝臣^古麻呂^二首 釋^辨二^大年中^ノ作^大伴^旅人^下毛^野朝^臣兼^麻呂^詩子^序等^ハ皆^ハ卷^末ニ^葛井^連廣^成の^注あり^シ○目録^ノ註^ハ累^々以^テ時^代相^次不^尊卑^等級^トし^テ真^書ニ^長久^二年^冬十^一月^文章^生惟^宗廣^言々^々又^康和^元年^ノ蓮^華ノ^元宝^藏ノ^中採^出ス^ル友^皇子^ノ首^孫淡^海等^ハハ^ハ文^院林^氏ノ^辨り^今ハ

刊本ハ元和四年山陽重顯の跋にその按ずるは古今和歌集の真意序
は大津皇子に代りて詩賦何作りて人才子國と慕ひ
塵はほろけりといふ支る日本のは賦ハ大津の皇子は歎けりといふ
もの多し今此集何ぞ大津皇子より先大友皇子の二首
何のせりといふれ大友皇子の賦ハ大友皇子と祖りていふや
文華秀麗集 写本 一卷
撰者はたゞしりていふにすはたかたき余りていふを
のせりといふ書系や二巻ありて古き書目よりいふは
いふはたかたきいふはたかたき

經國集

写本

六卷

廿書より二十巻とく良岑安世滋野貞主等の撰今存すは
殘缺の中六巻の目錄は左の本
卷第一 賦 太上天皇春江賦 滋野朝臣貞主重陽節神泉苑
賦秋河哀應製を至り十七首

卷第十 詩九 樂府 太上天皇塞下曲 惟春道賦得深山

寺 應太上天皇御製 五十九首

卷第十一 詩十 雜詠 平城天皇詠殿前梅 文章生後八

位下藤原朝臣令緒早春途中 五十九首

卷第十二 詩十二 雜詠 太上天皇雜言九日 菟菊花篇 伊水

氏 五言冬日友人田家被酒 四十四首

卷第十四 詩十三 雜詠 野太守五言奉詠 天 滋野貞主五言 遠

和播州淨長史丹洛中得絮柳請植 大將軍前院之作 四十

九首

卷第二十 策下 駿河介六位上紀朝臣真象の對策 文 大神

直也磨の對策 二十六首

○第一卷の奥書に曰康永癸未之歲初秋上旬之候於西郡島若祖校
舊言之野書之誤尚以有疑此書蓮華玉院室藏之本也近古以來
魚尾野之入金玉之聲久埋塵埃之底卷軸多々紛失取遺僅上

帙二卷 第一第十 下帙五卷 上二十二十四二十一 乞 上古之篇什興味

尤深仍軸 相不書子之畢 〇按す 〇眞 〇れ 〇殘缺七卷

カハ 〇今 〇才 〇二十一 〇卷 〇切 〇カ 〇ヤ 〇ル 〇ル 〇〇 〇卷 〇首 〇東 〇宮 〇學

士 〇後 〇五 〇位 〇下 〇游 〇野 〇朝 〇臣 〇貞 〇主 〇の 〇序 〇ら 〇く 〇る 〇差 〇〇 〇三 〇位 〇行 〇中 〇納 〇言 〇兼 〇右

丘 〇衛 〇大 〇將 〇春 〇宮 〇大 〇夫 〇良 〇岑 〇朝 〇臣 〇安 〇世 〇令 〇臣 〇等 〇鳩 〇訪 〇斯 〇文 〇也 〇詞 〇有 〇精

麗 〇濫 〇吹 〇瀕 〇辨 〇文 〇非 〇一 〇骨 〇備 〇善 〇繼 〇雜 〇々 〇又 〇ら 〇自 〇慶 〇雲 〇四 〇年 〇迄 〇子 〇天

長 〇四 〇載 〇作 〇者 〇有 〇七 〇十 〇八 〇賦 〇十 〇七 〇首 〇詩 〇九 〇百 〇十 〇七 〇首 〇序 〇五 〇十 〇一 〇首 〇對 〇策

卅 〇八 〇首 〇分 〇為 〇兩 〇帙 〇編 〇成 〇計 〇卷 〇名 〇曰 〇經 〇國 〇集 〇々 〇又 〇ら 〇先 〇八 〇秀 〇麗 〇者 〇即

不 〇刊 〇之 〇書 〇也 〇彼 〇取 〇漏 〇脱 〇今 〇用 〇兼 〇收 〇人 〇以 〇對 〇外 〇文 〇以 〇類 〇聚 〇々 〇〇 〇此 〇書

〇此 〇序 〇中 〇の 〇秀 〇麗 〇者 〇稱 〇す 〇書 〇ハ 〇文 〇華 〇秀 〇麗 〇集 〇カ 〇ル 〇〇 〇今 〇々

〇此 〇の 〇殘 〇缺 〇の 〇中 〇二 〇卷 〇の 〇中 〇の 〇中 〇〇 〇の 〇中 〇〇 〇の 〇中 〇〇 〇の 〇中 〇〇 〇の 〇中 〇〇 〇の 〇中 〇〇

帝 〇の 〇序 〇子 〇右 〇大 〇臣 〇常 〇大 〇納 〇言 〇弘 〇參 〇政 〇明 〇々 〇の 〇々 〇々 〇の 〇年 〇終 〇〇 〇

御 〇室 〇書 〇籍 〇目 〇録 〇本 〇朝 〇無 〇題 〇詩 〇十 〇三 〇卷 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々

七 〇十 〇首 〇其 〇中 〇太 〇政 〇大 〇臣 〇忠 〇通 〇公 〇の 〇序 〇九 〇十 〇首 〇の 〇中 〇〇 〇の 〇中 〇〇 〇の 〇中 〇〇 〇の 〇中 〇〇

蓮 〇禪 〇の 〇序 〇〇

本 〇朝 〇文 〇粹 〇十五 〇卷 〇藤 〇原 〇明 〇衡

〇書 〇十 〇四 〇卷 〇總 〇目 〇録 〇一 〇卷 〇加 〇ア 〇ク 〇十 〇五 〇首 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々 〇々

〇一 〇條 〇院 〇の 〇寛 〇弘 〇年 〇中 〇〇

三 〇言 〇〇

急状 奈文 額文 其餘諸體よ及べり作者ハ菅三品源英明 紀齊
 名 源順 中書王 江以言 朝綱 村上天皇 橘在列 清泉真
 友 慶付胤 後江相公 巨為時 都良香 善相公 澄相公 藤
 春海 菅淳茂 統理平 藤博文 橘直韓 江匡衡 紀淑信
 藤惟貞 江峯周 高五常 平兼盛 藤篤茂 藤倫寧 文屋如心
 源為憲 藤冬副 野相公 藤氏宗 藤原時平 都在中 野美材
 藤惟成 菅雅規 紀在昌 高積善 橘正通 田達音 菅輔昭
 高相如 源相規 藤雅材 紀淑望 紀貫之 戸部齊信 源道
 濟 藤行葛 僧寂照 其餘於人なり ○今此列中保年中洛陽西
 河慶士松永昌易諸家の訓点ハ参考一校録ハ刊行す寛永己
 巳仲冬羅山道春の序に云くこれハ活板の序也 ○此書の撰者
 藤原明衡ハ勘解由次官兼出雲太守 南家乃儒者也
 續本朝又粹 写本 十三卷 藤原季子編
 明衡の本朝文粹以ハの又ハあつたり式部大輔敦光の柿本人麻

呂贊并序もけ書一のせり ○東見記云續文粹ハ十四卷なり
 今十三卷なり

朝野群載 写本

二十三卷 三善為康

自序より多集及故之體以為知新之部類成之十卷号曰朝野群
 載時永久之曆丙申之年善家一儒為康撰之 ○此書ハ朝野群
 載類すといふも多官府より撰りて又難文の中ハ
 田地賣買券等ハものせり遊女之賦も一ハ遊女の名何れ
 めけりといふも他者の名何れも一ハ遊女の名何れ
 中書王 源順 大江匡衡 明衡 江佐國 以言 匡房 源經信
 菅原輔正等ハ其康のの文也 ○此書古き書目ハ
 ハ三十卷とあり今の中ハ十八十九二十二十三二十四二十五二十九
 三十以上七卷闕なり ○此書の撰者ハ康ハ崇徳帝の保延
 五年八月四日卒す

都氏文集 写本

一卷

都、良香の文集あり富士記に書中あり○菅公の母
良香の文集あり

菅家文章

十二卷

菅原贈太政大臣道真公の詩文集あり才七卷より才六卷までハ詩
才七卷より才十二卷までハ文章あり奥書に云文承元年八月八日
進北野廟院寛文三年丁未六月洛陽後学慮菴福春洞跋又元禄
十二年水戸府中村顧言校訂菅家文章の跋に云く我水戸西山公
篤好乎古每以印本文草誦閱向多往有不可解者為遺憾久之
獲一善本於某所欲廣于世乃命臚制勵氏校訂登梓於是填
其闕正其訛云々如其後草紙而僅有嚮搜京師錫倉得後草
二部亦昇坊向以資校讎云々○按ずるに御定書目詩家の部菅
家文集三帖又菅家文章十二卷とありや○菅家文集ハ銀勝朝權
の次ハ載り共ハ是善卿校とありや

菅家後草

一卷

此後草ハ菅公太宰府に貶任せられたりハの跡也なり○林道
春の本朝神社考に曰平生所詠和歌曰菅家御集其詩文曰菅家
文章其在菅家府所著詩文曰菅家後集○註曰御集一卷文章十
二卷後集三卷又別有菅家日記○扶桑略記曰曰恭三年庚申
八月十五日右大臣菅原朝臣上状奏進家集二十八卷○菅原陳経
ハ菅家御傳に曰曰恭三年八月十六日献上家集合廿八卷○註曰
祖父清公菅原家集六卷親父是善菅相公集十卷道真菅家
文章十二卷○按ずるに菅家文集十三卷とありや○菅家後集ハ
菅家後集十二卷ハ後集一巻ハ合せたりハのなり○林子の記ハ
今代列中ハ黒川道祐の云とあり

三教指歸

三卷一本

釋空海

三教ハ釋氏李氏老子ハ孔氏かり指歸ハ一書也○卷首ハ自序とあり
云聖者聖人教網之種所謂釋李孔雖淺深有隔並皆聖說若入

一羅何乘忠孝之迹曆十六年臘月之一日也

卷上 龜毛先生論 卷中 虛亡隱士論 卷下 假名乞兒論

○刊本再板と称すもの元禄十年河州高安郡獅子吼山教興寺苾芻蓮體の跋あり○大師遺誡曰年甫十二外舅朝散大夫阿刀大足世典所教へ文翰習學し十八歳に大學に入り直講味酒淨成し就く毛詩左傳尚書於聽復左氏春秋於岡田の博士に同遊すれども博く経史を瞻し志すれども心專佛經に在茲よりいづく此論を卷に作く近士に成るる魚空と稱す冠字あり及く泉州模尾山寺に於て勤操より後く雍深に沙弥の十戒を受七十二の威儀を學び名に教海と稱すもは復如空と改む

三教指歸覺明註 七卷

江府愛皇沙門運敬の三教指歸註刪補の序より先は前吏部敦光及成守とのいづく注解と撰すは是の二名が采輯しつる

三教指歸註刪補

七卷 沙門運敬

萬治己亥二月運敬自序より覺明は集めく大成すといふに尚、詳悉とせず○此運敬のいづく舊註と刪補すは乃釋の補つるもの刪補すは乃釋の補つるもの○此註は舊抄を引つて書成て聲響指歸と稱す蓋謙下なり入唐の目録へ去く學士某より示す某褒賞しとて三教指歸と改めしむ明攝以て了す○奥書より明曆丁酉年冬十月初七夜半於武城愛皇靜慮堂東軒運敬又武州藤邑に學教院住持隆敬の跋あり寛文三年春刊行す

文鏡秘府論 六卷 釋空海

詩式文法初編よりいづく声韻のいづく佳句のいづく自序より今剛峯寺禅心沙門遍照金剛撰しとあり

卷一天 調四聲譜 卷二地 論體勢

六十五

卷三 東 論對
 卷五 西 論病
 卷四 南 論文意
 卷六 北 論對屬
 性靈集 十卷 同上

弘法大師の詩文集なり大分の上足高雄の真濟之九松編すけ書目
 每巻の首は遍照發揮性靈集とありやう真濟の序之西山禅念
 沙門真濟撰集とありやう

- 第一詩 第二文 卷首は性靈集文章抄第三印融記とありやう
- 第三詩 第四文 第五第六第七文
- 第八文 卷首は統遍照發揮性靈集補闕抄とありやう
- 第九文 第十文并詩に載十喻詩九相詩等此巻中

性靈集鈔 十七卷 沙門運敬

本集の註あり又十二巻の鈔あり作者とつゞきしやうせす
 濟北集 二十巻 虎園禪師

東福寺虎園禪師の詩文集なり○紀年録に師諱ハ師鍊自虎園
 と號す姓ハ藤氏洛陽人なり父者左金吾技封母者源氏皆賢行
 あり五子を生師ハ其三なり○按ずるは虎園聚々韻略抄に
 りとやハハ二条院の嘉元四年なり又元亨釋書の巻末は六日
 本國平安城濟北大沙門虎園禪師諱とありやう

寂室録 二巻 沙門寂室

江州水原寺開山玄光寂室の集なり寂室ハ南禅寺佛燈の嗣法
 乃弟子なり南遊して之中峯國師端元叟及古林澄清拙等
 の名衲に参扣せり元亨のころは五十六歳水原に於て示寂す七十八歳
 かり天龍建仁の徽命撰辭一枯淡寂甘一たり名僧なり虎園
 推詳けりは二條良其全公より其筆跡に依り賞す

梅花魚書藏 四巻 漆桶萬里

万里の詩集なり多の自註ありその中よ玄光國師の註もあり
 一新安手筒とあり○梅花魚書藏ハ万里の別号なり

ちてふかゝる集のなほむらさき... 一て... 體付曉風... 醫書又梅花魚畫藏之卷... 以て... 混す...

帳中香

二十一卷五十本 同上

山谷詩集の抄し字なり... 卷の... 梅花魚畫藏漆桶萬里編... 萬里博涉群書尚友古人暇日把此集... 中香曰昔龍樹觀華嚴而知其宗趣也... 也後末學者觀之必領其上旨也... 以香為佛事之者定非虛發是以名焉... 魚畫藏萬里老人講獲黃兩家之詩集於棘隱軒而作鈔日久矣號曰天下白白帳中香其鈔之至精也能決人之狐疑知為世

四河入海

百卷

東坡詩集の抄なり建長寺の住笑雪子法座主... 活字なり... 瑞溪の脛説... 萬里の天下白白... 東坡夢雪... 白...

翰林蒔蘆集

一卷

半陶稿 六卷 此書を禅僧宜竹の詩集なり宜竹を明應の... 人なり

相國寺法住院の彦龍藏主周興の集なり彦龍ハ深草の陶工の子横川和吉の弟子なり

菅原の曰彦藏雖為異教之徒又一代偉人余所甚愛重也

南禅寺の前住東福寺の見住彭叔守仙の詩偈文章の集なり

天文年中の作多し一聚か韻の跋北野天神の贊并序等なり

天神の贊并序は渡唐天神の像のよきなり

妙心寺宗休和尚の詩文集く多し永く天文の氏の著述なり

追悼及い當時諸侯の香語寺の依り多し

狂雲集 二卷

一休和尚の詩集なり和尚名ハ宗純別ハ狂雲子ト号すなり

集の名とせり

本朝一人一首 十卷 五本

萬治の初院林氏の撰なり大友皇子撰なり

世諸名家三百餘人の撰なり一首毎撰しのせり

惺窩羅山の撰なりこれ撰のせずは撰所一作者の世系撰なり

本朝百人一首 一卷

林道春の撰なり中古也

明暦元年命撰なり道春春齋春徳これ撰撰す其書ハ漢魏六朝唐宋の名家百人の撰なり

本朝詩英

五卷 三本 野間三竹

上天子より下群臣よりして、各體、河、ふ、く、く、の、河、集、む、弘、文、院、林

氏、竹、洞、友、之、ホ、の、序、あり

惺窩文集

八卷 藤原肅

右、承、肅、字、欽、夫、惺窩先生の詩文集なり、定家卿の苗裔、
一、く、下、冷、泉、の、紙、の、子、なり、播州細川より、
二、夫、なり、龍野の吳東明の弟子となり、
後、洛の相國寺より、
寺院より号するなり、
看破し、
啓し、
え、ぬ、鬼、の、島、根、
が、
肉、山、人、と、号、す、

同

十卷

集三卷ハ菅玄同、
債集乃未、
長嘯道春等の贈答あり

羅山文集

百五十五卷 二十本

此一本ハ惺窩先生の男、
後光明帝御製の序あり、
興す、
妙、
室、
林道春の詩文集なり、
録一卷 詩集目錄二卷 附録二卷 共、
附録二卷 共、

徳之れ初編集す。幸島宗意の和板書籍考に曰羅山文集日本第一の大部の文集なり朝鮮の命秋潭日本之文章以羅山為第一のひのハ調をなすことす。古今獨歩ののり。世よ詩文として取捨しきとの評議あり。凡例又文粹詩選後世博雅者ト學士のあつたを以て其心察すべきものなり。

梅洞集

四十卷

林春信

弘文院學士の嫡子春信の詩文集なり。自撰詩集十卷文集十卷續詩集二十卷共四十卷。竹洞友元の序あり。春信一名慈字ハ孟著梅洞と号し又勉亭と稱す。神童奇材の譽あり。二十四歳に卒す。此集詩文集は梅洞の自撰なり。續詩集ハ弟春常これと編集す。春常一名慈字ハ直民。慈字ト號す。

讀耕全集

二十卷

林春徳

羅山の次子讀耕齋春徳の詩文集なり。春徳一名ハ靖字ハ彦復。何んハ讀耕林子と稱す。

活所遺稿

十卷

那波道圓

那波道圓の詩文集なり。其長子祐生木菴守之これに編集す。門人客軒悰恕の序あり。活所播州姫路の人なり。初醫術ハ半井氏よりし。後醫術を棄て。惺高の門に入。程朱の学を傳。惺高の人の中より其名を著して。肥後侯に仕へ。老後ハ紀藩に仕へ。すの未行状と附す。其作者門人奥田松菴なり。

老圃堂詩集

三卷

那波木菴

道圓の嗣子木菴の詩集なり。木菴名ハ守之字ハ元成。父の業を継ぐ。紀藩に仕へ。

覆醬集

三卷

石川文山

石川文山の詩集なり。文山名ハ四六山人と号す。老後ハ巖山の麓

一乘寺村の隠して詩仙堂松營む

覆将西集頭書

三卷 野間三竹

三竹字ハ子苞静軒と号す松永昌三の内人として文山の詩友

覆将西全集

二十三卷 十四本

文山の詩文集がうりひの新編覆将西集と号す 正集四巻詩四
百首松のす文山自撰がり松永昌三野間三竹の序あり巻首二年
譜とのす人見友元作し 續集十三巻文山内人石川半助これと
偏す第一巻より第七巻まで詩七百餘首とのす詩の批評野間
三竹がり 第八巻より第十巻まで 銘贊書牘等とのす巻首
二野間三竹の序あり次目録と奉 附録三巻石克これに偏す
詩仙堂記三竹作の文山墓誌銘同行状寺松のせり弘文院学
士林子の總序正集れ巻首よのせり
二十卷十五本 沙門元改

草山集

城州深草瑞光寺の住持元改の詩文集なり 本集二十巻元改の
自撰がり妙心寺大嶽の序あり 續集十巻八門徒の手いふり
建仁寺通憲長老作の行状と附す元改初江州彦根城主井伊
氏よ仕へ石井平之丞元改といふ二十六年出家して法華律儀
持し瑞光寺に住し父母を孝行し石川文山陳元贊と往來し
て文四十巻著し示寂す元改妙顯寺の日豊といふす傍
儀といひ文雅といひ寔は近世の名僧なりといふ

谷口山詩集

六卷

此書ハ草山集二十巻中より諸體の詩の松ぬきあつての
がりのやうに別々元改の和歌集あつてゑの和歌集と号す
一やうに陳元贊と贈答せり和歌集めくえと唱和集と号す
二がうにこれハ元改といふらつてゑ

史館茗話

一卷 林春信

此書漢文として皇朝の詩話文論をあつてゑとせり弘文院林氏濠

補す羅山の門人辻脚道の序あり

歷朝詩纂首編

二十卷十本

大同弘仁の頃より當代よりその行はあつてく一百卷十本其中
保元平治の頃より前編より〇凡例曰濟南之區卧子之選或
ハ二字が易りハ教語が刪より去て頗作者の切なり今同其例
に倣く一字の声調格律に當りてのべきはたあつてんは
らむに實に千百中の一の〇引書二十七部次は詩人の世次
爵里に記せり前編の作者二百四十四人〇此書ハ守山侯後四位
侍從源賴實黃龍公の撰し宝曆丁丑六月服之喬序同丙子九
月藤政徳序同年二月黃龍公の自序等あり

歷朝詩纂

後編

二十卷十本

高倉院の嘉應承安の比より當代よりその行はあつて當
代諸名家の集のついでせりハ其の文より其の集の特なり
そのものハこれハ國たあつて二首はこれハ其の行はあつて

其の人の歴人ハ其の思ふことハ已上凡例と
節略す〇江村君錫ハ日本詩史曰余近本朝詩纂を覽と其の
るハ盛舉ハ欽敬す但其中京師近時の作者ハ錫次す〇大
は憤りて其其董猶雜陳ハ論す〇余ハ伯氏ハ載
ふ〇伯氏の姓名ハ録し又別ハ伯氏の舊名舊表號
ハ此伯氏一人ハ以て二人とす餘ハ準知す

日本詩史

五卷三本 江村綬

皇朝古今の詩人ハあつて其の工拙ハ論すハ以て詩史ハ
セリカハ〇凡例曰此編ハ詩ハ論すハ以て人ハ其の行はあつて
て以て其の行はあつて

第一卷 中古近古の公卿の文学辞藻ハ論す〇白鳳より

始め慶長の末に記す

第二卷 初卷の緒餘〇武家 医家 隐者 釋氏 国秀の

ハ論す其年代ハ初卷に同し〇其の行はあつて

たき代以て近時の人附し附しと満せり
 第三卷 元和以後京師の藝文附しと兼て他心及ぼせり
 第四卷 東都の藝文より一〇〇他州の藝文及ぼせり
 第五卷 第三第四兩卷の緒餘より一〇〇此書採摘するの古人の詩ハ懷風藻 經國集 麗藻集 魚題詩集等なり〇明和庚寅仲冬 拙木太玄序 同辛卯之春 弟清絢跋 同年上木す

醫書書類

大同類聚方

百卷

大同三年右衛門佐安倍真負侍医出雲廣貞等勅撰奉下て撰す
 全書八七ひく今存すところ鈔録一卷なり〇卷首は五位下典藥頭安倍朝臣真負 侍医從六位上出雲宿禰廣貞奉勅同撰と云
 たり其説は曰官府のしるし神代の遺方之策なり今存す四方は
 立少考名命の言に任せし十二方と云り又一方則十三科具り
 上古の用藥唯三十品の名をのり今一殊りこれに附す〇
 第一藥名部二十九種 和名附しよあけ漢名附下り附す久良
 良 苦參 佐保比女 地黄 加太保重 半夏のち〇第一卷 浸
 路藥 日向藥 大國藥 第二卷 長門藥 鏡藥 伊母藥
 第三卷 出雲藥 於乃古呂藥 第四卷 七藥 中藥 第五卷

土佐藥 奇玉藥 與波伊藥 已上十三方
○文治元年十月典藥丹波良康が跋より醫方の我邦を去りし中世よりす赤心の民他邦の藥を服し其何ぞ其惠を感せんや人を去りて其地を以て稟氣の僻あり其土人より土宜を服す切なきを以て之を去りし大同天子医官を勅し類聚方を製せしむるの計如何なるか一んや予れを承りて其十三方を鈔録し以て之を撰傳す
○釋大德言定親の眞書といふ秘中の秘なりものち
○此鈔本安永二年癸巳三月浪義兼葦葎堂主人木孔恭校訂し刊行す

醫略抄

一卷

丹波雅忠

永保元年侍医丹波雅忠これ撰す卷首に序あり○書中多く千金方病源論を引き○方五十方あり諸方は方一々のせり○按ずるに雅忠は日本の扁鵲と稱すしハナハナ訓あり丹波雅忠花山院の侍す時、鹿國の後妃篤疾を罹りし

雅く中めよ請て雅忠が治せしめんと欲す氏部以経信のそとく高麗の後妃の生死我本朝に聞ふべし何ぞ雅忠を以て遠くを馳よ赴き一人やと大の匡房を命じし目翰を製せしむ其畧ありし雙魚難逢鳳池之浪扁鵲豈入雞林之雲乎○刊し寛政七年五月丹波元簡序同八年丙辰陽月丹波宿祢遠裔侍医法眼快菴頼幹跋りし卷末に大日本史丹波雅忠の傳に附す寛政八年十二月刻

萬安方

写本

五十卷

梶原性全

羅山文集に曰安信、眞負、出雲、廣負が大同类聚方菅原隆嗣の金蘭方丹波雅忠康頼の医心方大医博士源輔仁の倭本草養生抄小野氏の集註大素經其後平性全の萬安方僅に世に存す余當り萬安方なりしを鹿苑相公の花柳ありし世に副本罕かりし○東見記に曰梶原性全萬安方五十冊作し鹿苑院義満の袖判あり建仁寺の大統菴より此医書ありしとき医立治法印

銀十枚を買取已性全集の頓醫鈔のり官庫より頓の字
の訓は... 〇本朝医考は曰握原性
全何の處の人... 〇本朝医考は曰握原性
仕へく医術を施し... 〇本朝医考は曰握原性
撰す

頓 醫書 鈔 寫本

五十卷 同上

卷首題号は下は性全集の三字あり奥書曰為救倉卒之病
聊抄藥方之要云病篇目之療養之旨趣頗難近俗言廣尋古
賢之訓兼和今案之詞是則欲令見者易論也而已于時嘉元
第二曆南品上旬天書之性全〇又天文十八年己酉五月中旬十
三日守憲の奥書曰〇按ずる此書田各中及缺中尋中れよ
せり... 〇又按ずる黒川道祐
本朝医考は頓医方十卷とありヤハ略中なり一といふは十卷

の... 〇又按ずる黒川道祐

葉葭堂所藏頓医鈔目錄

- 卷第一 五臟六腑虛熱寒熱證治 卷第二 諸風 〇諸中風 七慶灸
- 卷第三 五臟中風形 脚氣禁好物 秘藥 灸所 〇諸虫食良集
- 卷第四 上傷寒序言 卷第五 中傷寒 傷風之秘穴
- 卷第六 下傷寒 傷寒灸所 暑氣 卷第七 積聚 癰疽 疔毒 赤白痢病
- 卷第八 積聚 下疳 痔 諸臟病 〇下痢
- 卷第九 傳屍病 附 骨蒸 諸瘡 落葉 又傳屍病 〇灸
- 卷第十 〇
- 卷第十一 諸氣 五膈
- 卷第十二 諸氣 下 延壽丹 遏山丹 秘方
- 卷第十三 嘔吐 霍乱 婦人血塊 懷妊吐
- 卷第十四 五痔 并水腫物脹滿病 卷第十五 諸虛損 傳屍病 虛損 〇灸
- 卷第十六 諸淋 遺尿 諸小便 并灸所 卷第十七 喘息 咳嗽 痰飲
- 卷第十八 癩疾 狂病 卷第十九 眼鼻耳 又一切目病

卷第二十 齒口舌喉唇又齒喉重舌次下治方

卷第二十一 疝氣 偏類 卷第二十二 消渴 內消

卷第二十三 吐血 嘔血 唾血 大小便血 卷第二十四 癰疽 疔瘡 內瘡 諸膏藥方

又膏藥方 卷第二十五 中惡 卒死

卷第二十六 黃疽 卷第二十七 婦人月水以下病 長血 痲內藥

卷第二十八 婦人中風以下諸病 卷第二十九 婦人一切難病

卷第三十 婦人求子以下諸事 懷妊之間諸病事

卷第三十一 婦人懷妊之間諸病 婦人汗血 吐血 尿血 下血 乳汁暫留治方

卷第三十二 婦人臨產 滑胎 產後之諸病

卷第三十三 婦人產後之諸病 卷第三十四 癰病之秘傳

卷第三十五 少兒變黃 諸風 驚癇 客忤 癰病 疔病 夜啼

卷第三十六 小兒傷寒 溫病 解顛 卷第三十七 小兒咳嗽 喘息 疹瘡 癩疹

卷第三十八 小兒疳積 疔瘡 積聚 丹毒 頭瘡 白禿 蓮根

卷第三十九 小兒雜病 疥瘡 赤草 白草 穴草 等

卷第四十 諸病之禁好物 卷第四十一 家脈全要 病人生死十種物

五種物 目藥 痢病藥 浮藥 卷第四十二 撮要 調人 鍼灸 完色 雜

卷第四十三 五臟六腑形 五藏諸法配樣 卷第四十四 五藏六府形 五藏諸法配樣

卷第四十五 二秘方 二交接等治 卷第四十六 醫師要心

卷第四十七 諸藥功能 卷第四十八 諸味功能 清渴秘藥

卷第四十九 秘傳 石草藥 上下品事 諸藥調系之事

卷第五十 卷性諸篇

捧心方 寫本 二卷

卷首の漢字の序も云我邦濟生の業を以て成せしむの惟神の両家のと近世旁支横派道を和家其傳の丹家の師承して其右長き其我邦の秦越人乎萬安頓医の両方り萬安ハ秘しつて下頓医ハ今世も秘しつて道全しり也英特の士り我邦の群書ハ嫌く船に附し

年后彦明附益之至今天文七戊戌年已得二百二十三年

袖珍方 明高祖洪武二十四乙亥年所著也當本朝後小松院應永二年至

今天文七戊戌年得百四十八年

得效方 危亦林元朝至元三年丁丑所編也當日本後醍醐天皇建武

四年至今天文七戊戌年已得二百二年

直指方 楊士瀛元景定五年所編也當日本龜山院文永五戊辰年至

今天文七戊戌年二百七十四載

玉機微義 徐彥純劉宗厚明宣宗正統四己未年所著也當日本後花

園院永亨十一年至今天文七戊戌年已得百年

醫書大全 熊宗立明宣宗成化三丁亥年所著也當日本後土御門

院應仁元丁亥年至今天文七戊戌年已得七十二年

奇效良方 七人良醫明宣宗成化六年庚寅所撰也當日本後土御

門院文明二年至今天文七戊戌年已得六十九年 方賢 揚文翰

宗武 趙璣 許觀 貴珍

婦人良方 陳良甫嘉熙元丁酉所著也當日本四條院嘉禎二年至

今天文七戊戌年已得三百載 熊宗立補遺著之

錢氏小兒方 錢乙門人闕孝忠編集熊宗立類證明心統五年庚申也

當本朝後花園院永亨十二年至今天文七戊戌已得九十九年

本方 丹家心傳中川公躬著也則後花園院室德三辛未歲也至

今天文七戊戌年已得六十九載

右十餘方藥方功能分量加減異同具勘錄之

十三要方 徐用和明宣宗成化十六庚子年所撰也當本朝後土御門

院文明十二年至今天文七戊戌年得五十九年

嬰兒得效方 李景芳所著也明熹宗鈔梓己正統甲子本朝後

花園院文安元年也今至今天文七戊戌得九十五年

卷一 四時之常脈 通不及之脈 扁鵲六不治 諸風 中寒 中暑

中濕 傷寒 卷十一 小兒諸證 卷十二 別集 五臟內外所因 六根秘方 諸毒 雜方 九蟲論 蒼耳

說用藥可否 八卦配合 食忌 枕上記 養生秘訣 醫貴二世

○按之曰前の南禅の海甫和尚平時暇日空義交黄雷公岐山前後編
鶴長桑君淳于意孫真人より以て今古歷代の名医を述ぶるの群
書の萃然採集めり大成して十有二卷あり 新增補遺捧心方
と号す 禅餘の奇談なり其の實は絶世の珍貨なり 和尚今す
かち亡す神足景盧首座より切成名遂て郷を還るの夜一語を
其志をへし描くことと需むる 永祿第七甲子仲冬念日十二位
建仁鐵曳景秀 ○此書友人左藤恒安の珍藏す ころかり借
閱し ころかりにけり

延壽類要

一卷

竹田昭慶

此書一卷五篇 養生の論食物の性味等類あり 康心年
中竹田法印の作なり 此書は鯛の性冷なり 何人の説より
とり 不審なり 和板書籍考に海せり

神應經

一卷

此書本朝として成りし書なり 一巻あり 和氣丹波の両医腫
物に治す 八處の灸法抄のすなり 以てこれあり 〇此書は
明の第二主仁宗の洪熙元年の頃成りし 當時の王子 醫士劉瑾
手抄經に書かり 劉瑾が師は宏綱先生陳會字は善同と
針灸は精し 其人は其人の作は廣愛書十卷あり 此神應經を
その中に 要穴抄に採出 病證あり 一巻あり 〇
その本朝の抄なり 和丹兩家の八處の灸法抄卷首のせり 〇
ハ朝鮮の韓繼禧が神應經の序あり 成化九年十月 日本畠山殿
より朝鮮の使者が 〇其時の副使沙門良心より 〇の抄を
採り 朝鮮國王は 〇且日本の神医和介氏丹波氏癰疽治
す 〇八處の法に傳ふ 〇因る 〇灸法と神應經の末に附して板行
す 〇今刊本は 〇彼灸法抄卷首のす 〇作者の 〇
〇成化九年ハ日本後土門院の文明五年に 〇此時乃
公方ハ常徳院義尚公と 〇義政公も在世なり 〇畠山殿ハ管領修理大

夫表統（イ）の按（下）の朝鮮國重刊神應經の序に曰適有日本釋良
 心以神應經未獻兼傳其本國神匠和介氏丹波氏治癩疽八元法
 之聖上嘉歎命以元法付於神應經之末鑿梓廣布以水其傳
 之成化十年十一月二十一日推忠定難郡戴純誠明亮經術佐理功臣宗
 祿大夫西平君臣韓繼禧謹序の松下見林の曰今按下之成化と明の
 憲宗純白皇帝の年號成化九年ハ日本後土御門院の文明五年ノ當レ
 此時能登國の刺史畠山義統足利の老より良心ハ信濃の國の人
 釋氏（イ）とく医かり角山のため使初奉ずく新續古今和歌集
 小良心法師河上落葉の歌けり蓋ふの人とく

古今奇驗連珠方

活民子
 活民子編とせり自序に曰余諸方於歷觀するは用也
 きのものけり用也とせりものけりとく今
 及く奇驗果とく連珠の如きもの編集とく以て古今
 奇驗連珠方と名けりとく亨徳甲戌十有一月丙寅活民子序

精英本草

二卷 同上

卷首に祖師禁日六神五畜大明日五入五惡五神八火次葺醫師三心
 病者三心ののけり下次は精英本草製使目錄あり
 卷之三 辰砂滑石の類八種 卷之四 鹽 卷之五 鹽土の類三種
 卷之六より卷之十一巻まで 草部 卷十二より卷十五まで 木部
 卷十六より卷十九まで 獸部 卷二十より卷二十二まで 蟲部
 卷二十三より卷二十七まで 果部 米穀部 卷二十八 菜部
 ○目錄の次は活民子自序ありと次は精英本草歌詠集とありとく
 氣味切能然七絶と化とあり此は精英本草歌詠集遺詠藥名
 の序巻末に天文十八年己酉九月廿二日とありとせり

精選秘方

一卷 二本

中風中寒より小兒諸病といつとて病門のちとく薬方都合三
 百八十方載の巻末に天文十八年己酉拾月下旬日三輪寺釋迦院
 源貞とありとせり

福田方

十二卷 沙門有林

卷之一 諸氣脾胃 卷之二 腹中諸病 卷之三 虛勞羸瘦
 卷之四 風寒暑濕 卷之五 脚氣雜風 卷之六 傷寒瘧疾
 卷之七 咳嗽吐血 卷之八 前後兩陰 卷之九 婦人小兒
 卷之十 七孔瘡腫 卷之十一 卒疫熱藥 卷之十二 脈臟灸要

○此書本文自序にも片假字にて云々あり才十卷の奥に有林福田方卷之十右此一巻者天文四年未六月日長圓口筆と云々あり又他の卷に守憲書之と云々あり奥書にもあり○序に白紙諸氣より終雜病より云々あり万病都て盡す百病悉くなく云々あり此方所傳て人極ふものハ苦輪の抜濟に修すなり彼藥を用く瘻と瘻すものハ福田の善苗を植ふなり云々あり斯義は沿て方名に述すと花喬の尊卑博く城と騎と和の編素同く福田の家らん云々あり其書云々あり 隱士沙門有林序○此書近未刊本世に在り今兼葭堂取藏の古写本に依りて云々あり

袖中記秘方 写本

二卷

第一卷 中風 諸氣に至り 第二卷 諸虚より小兒に至り

○跋に白眼の次為竹軒に依りてあり云々あり此方所傳て人極ふものハ苦輪の抜濟に修すなり彼藥を用く瘻と瘻すものハ福田の善苗を植ふなり云々あり斯義は沿て方名に述すと花喬の尊卑博く城と騎と和の編素同く福田の家らん云々あり其書云々あり 隱士沙門有林序○此書近未刊本世に在り今兼葭堂取藏の古写本に依りて云々あり

○按ずる本朝医考に曰和氣氏瑞策真長の子なり自通仙軒と号し又鹽菴と稱す心親町院勅に院の字に賜ひ通仙院と稱す僧綱と歴す云々あり以て素絢に著す云々あり聽ふれ且和氣氏に付す云々の医心方二十卷に依りて

草全日用奇妙集 写本 一卷

慈濟軒方書 写本 六卷

興福澄一禪師医方なり諸病門に於てこれ等のすゝめり
清朝人の書入りり○友人木世爾嘗て此方書を以て九島の書と和
尚と交りこれに於て欲すといひりては市中に購ひ
りくは賞他より大なり

啓典集 八卷 翠竹軒道三
道三乃方書なり天龍寺策彦れ序に及此書は親町院の獻覽に入

切紙 一卷 同上

宜禁本草 二卷 同上
四十門よりなり医士初学乃あり也

天心記 二卷 同上
藥性のものありて道三壯年の時乃著述なり
天心乃此の配劑簿なり診視せりとの姓名知りしとあり

續天正記 一卷 同上
先の天心記の續編なり

濟民記 三卷 同上
病門に於てありて藥方に附す俗人の足やうんがあり

醫法明鑑 四卷 延壽院玄朔
病門に於てありて方論のすゝめり○此書刊すハ医方明鑑と作
る今玄朔自筆の奥書に本を就くこれにあり○奥書に曰依り生
其之末授與之元和癸亥季春中濟 延壽院玄朔印中東井の字

延壽撮要 一卷 同上
養生の要語にありて此書後陽成院に獻覽しり

梅子の梅子と云はれは道三と稱す一溪の孫なり

一漢氏伝古道三編す
食醫要編

一卷

僧元政

此書ハ深草の元政乃作す僧家食物の性味を記す

廣求經驗秘方 写本

一卷

向井玄升

眼目部 十六方

婦人部 二十方

口中部 廿方

瘡瘍部 六十二方

小兒部 廿五方

心腹部 二十方

二便部 廿二方

損傷部 七方

癰疽部 五方

喉鼻部 三方

四肢部 四方

毛髮部 四方

解毒部 三方

黃疸部 二方

耳鼻部 二方

五絶部 一方

雜病部 六方

頭痛部 附諸瘡 八方

痰喘部 附喉痺 五方

○卷首ハ先生金右衛門漢文の序あり享保三年歲在辛丑後七月下弦前長崎陽領住攝坂先生氏咄雲欽叙とあり○葦葭堂藏本の跋語曰右廣求經驗方ハ卷長崎山西金右衛門手筆本吾郷大森氏所秘也因懇求假其真蹟摹寫以藏于家云己酉春三月浪速木

本朝醫考 孔恭識

三卷

黒川道祐

日本の名醫の傳何とせり

上卷 大己貴命何始と細川勝元何終とす

中卷 和氣丹波両流の人と上池院竹田古田久志本 壽命院

下卷 國史の久えり醫藥の故實 丸散藥石の名 古代諸國

進年の雜菜 本朝医書目録 高麗牒狀等何のす

○寛文癸卯十二月弘文院学士向陽林子の序あり○此書ハ卷々としてなり

本朝医書目録

治瘡記

一卷

大村直福撰

攝養要訣

二十卷

物部廣象撰

金蘭方

五十卷

菅原岑嗣撰

藥經

和氣廣世撰

和書部五

醫心方

集註大素經

大同類聚方

難經問答

養生鈔

掌中方

倭名本草

萬安方

頌醫方

靈蘭集

二十卷

二十卷

百卷

一卷

七卷

一卷

十卷

丹波康賴撰

小野藏根撰

安部真自撰

出雲廣貞撰

源輔仁撰

同撰

同撰

梶原性全撰

同撰

細川勝元

契丹養生記 写本

本朝医考卷之上 白建保二年二月四日源實朝卿病りて群臣こ

二卷

釋榮西

群臣こ

思持すは右端の書冊今もいふは二三部に存す嗚呼惜哉聊其名何

是の患ふ時は兼上僧正釋宗西竊に二前夜宿酒の餘醺の致すく
ころかろくは聞てたらちら清茶一盞かきいひて契丹養生記二
巻の献が實朝卿悦てこれに服し頃醒東鑑

安驥集 写本

假字としてや療馬の書にこれに薬方があるといふ二十巻の
末に安驥集根元のいふに馬師皇才驥禁驥讀書安誦

六十卷 二十一本

圓鏡 写本

同療馬の書なり序に云くは病の脈もろくは病生死

二十卷 一本

乃病也く安驥集にもあるは病の脈もろくは病生死
察し平仲國子孫に於て此道智恵とすて字とあつめ
たがらるるべきなり書記すはこれに名は

梧桐 写本

これ療馬の書なり序に云くは霧の巻よりつら

ていへば此書は弘法大師の作なりと云ふは、秘府論三教指帰
 性靈集等から採られたるや、今此が、弘法大師の作なりと云ふ
 べし文意と云ふは、弘法大師の作なりと云ふは、弘法大師の作なりと云ふ
 を弘法の他に、弘法大師の作なりと云ふは、弘法大師の作なりと云ふ
 序より、彼之実語童子之為教、琵琶之為教、長恨之為教、庭訓
 雜筆之為教、往來也。至若、經、作、日、樂、府、詩、歌、為、朗、詠、者、卷、影、文、繁
 々、此、序、ハ、花、園、院、の、文、安、元、年、の、作、ナリ、云、レ、ハ、也、實、語、教、の、世、ハ、也、
 〇安藤為章が契沖河間梨行実
 語教不日又記云々

童子教

一卷

釋安然

惠空の説は、弘法大師の先年、京都より、山門の法印と云く、法華
 經の秘註が相傳せし、時、ら、か、み、の、一、つ、つ、つ、世、實、語、童、子、の、二、教、
 誰人の作ずや、法印の、童子教ハ、五大院の安然和尚の製作と

うの故ハ和尚が、時、洛陽、花、信、た、い、の、童、子、教、
 あつて、な、い、か、と、云、セ、書、知、る、と、云、フ、ク、ス、一、日、何、作、れ
 ず、と、云、フ、と、云、フ、此、書、を、製、作、し、と、云、フ、代、は、い、は、い、と、云、
 ら、と、云、フ、の、一、つ、の、卷、の、み、り、と、云、フ、幼、童、の、誘、引、せ、ら、れ、め、の、因、果
 の道理、初、め、の、一、つ、の、卷、の、み、り、と、云、フ、幼、童、の、誘、引、せ、ら、れ、め、の、因、果
 心義、即、身、成、佛、義、私、記、を、し、と、云、フ、文、義、一、つ、の、卷、の、み、り、と、云、
 〇作者の傳ハ、元亨釋書卷之四、曰、釋安然ハ、傳教大師の系族
 秘餘、蓋、カ、又、花、山、の、遍、昭、と、云、フ、胎、藏、の、法、規、と、云、フ、
 九、經、論、涉、獵、一、匠、家、の、馳、騁、す、と、云、フ、大、教、師、輔、助、
 徐、居、等、の、編、集、せ、し、經、國、大、典、の、卷、之、三、と、云、フ、字、字、倭、学、伊、路
 波、消、自、心、書、格、老、乞、大、童、子、教、雜、語、本、草、議、論、通、信、鳩、養、物、語

庭訓往來應永記雜筆 田士之く自徳慰草後然草第百二十
 五段 資乎大納言入道の御つる傳の傳りたる大納言入道に於て
 とむわ乃ほん初ごえたすごんども不問者不答と云ひ五字の御し
 め初るすくく一代乃字向初むかゝりしゆれ一公此世まの恥むのこさ
 を侍。此語安然和尚の童子教よるすくく物別何のた初學す
 んも我身の初めハセすたごふのすくく初めん人の初とめん
 とのゆかりつたあふ童子教つるのあふ書初と直下と初らひ初
 てててもん初めつるのあふ初めつるゆへは尚書初と古のよるあふ
 今初めつるあふ初めつるゆへは一切初めつるゆへは初めつる
 ん初めつるゆへは初めつるゆへは初めつるゆへは初めつる
 来第六天の魔王の眷屬つるあふ初めつるゆへは初めつる
 初めつるゆへは初めつるゆへは初めつるゆへは初めつる
 報の初めつるゆへは初めつるゆへは初めつるゆへは初めつる

實語教童子教諺解 三卷

釋惠空

紀州淨福寺惠空和上十五歳の時作る。漢字の序なる實語童子
 教初めつるゆへは初めつるゆへは初めつるゆへは初めつる
 と云ふるゆへは初めつるゆへは初めつるゆへは初めつる
 の二經舊來尚行をもつるゆへは初めつるゆへは初めつる
 其書初と申五言初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
 初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
 初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
 初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初

和論語

十卷

卷首に漢文あり此書の起るゆへは初めつるゆへは初めつる
 の別當清原良業勅設初家より神託及び聖帝の金言武の忠
 言貴女の至言初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
 記録せり上皇慶覽の時此書は是中初初初初初初初初初初初初
 初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初
 初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初初

和論語

和論語

のりこの此次代々撰者の次第とす

承久三年正月十八日 穀倉院清原良業 在判
 建長四年八月十五日 大外記清原朝臣頼尚 在判
 弘安十年三月廿一日 穀倉院別當清原良季 在判
 元徳三年九月十九日 穀倉院別當四位下清原良枝 在判
 同御宇勘辨 四代侍讀清原朝臣宗尚 在判
 文和四年十一月廿二日 主水清原朝臣良兼 在判
 應永二年三月十五日 大膳大夫大外記清原宗季 在判
 應永廿五年六月廿日 少納言大外記清原良賢 在判
 文安二年八月朔日 少納言大外記清原頼季 在判
 寛正六年十二月十九日 大外記清原宗業 在判
 長亨二年七月廿九日 大外記清原良宣 在判
 永山三年四月十三日 三位行宮内卿清原宗賢 在判
 天文十二年五月二日 從四位伊豫介大外記持賢 在判

同御宇勘辨

永治十二年十一月廿二日
 寛永五年八月十五日

少納言清原朝臣宣賢 在判

かみ代々撰
 後ホのくくく

細川兵部大輔源藤孝 在判
 從四位上右中將源重秀 在判
 洛東山隱士長肅子 在判

- 第一卷 神部
 - 第二卷 人皇及親王部
 - 第三卷 公卿部上
 - 第四卷 同下
 - 第五卷 武家部上
 - 第六卷 同下
 - 第七卷 貴女部
 - 第八卷 釋子部上
 - 第九卷 同中
 - 第十卷 同下
- 卷末に長肅子これの跋あり寛文九年上木す
- 十部抄 三卷十二本

撰者つぎつぎなりすの序を今何れはせんか昔今のもの
 ぶらねたゆりくくく

言舌とてやゝ義研に道に於ては、
の寸はわく解は、
にらやりのと大内神道の
もたつるは、
掛堵は、
まはるく佛教は、

孝経外傳或向 写本 四卷

熊澤了芥

孝道の、
こやう毎條或向は、
琵琶笛が、
ゆいなる、
長ぬは、
はらうは、

比賣鑑

三十二卷

藤井懶齋

第一卷より第十二卷まで、
紀行とす、
てまゝ、
お採、
一月伊萬子、
くけ、
らる井、

壺の石文

十三卷

撰者つぎ、
かき、

帰雁の文 上中下
志のけい、
似せ、

介婦の訓 一卷
賢女貞女の判 一卷
或人乃怒 上下

慈母乃嘉言 上下
貞女列女の判 上下

女四書

女孝經

二卷

系中

一卷唐の陳翥の妻鄭氏の作し

女論語

二卷

系中

後漢の班固が妹曹大家が作し曹大家の曹

世族の妻なり

内訓

二卷

系中

一卷明の太祖の皇后馬氏の作し

女誡

一卷

系中

曹大家の作し

此四部乃書所合せものなり一巻一巻の明の皇后馬氏の作し
此四部乃書所合せものなり一巻一巻の明の皇后馬氏の作し
此四部乃書所合せものなり一巻一巻の明の皇后馬氏の作し
此四部乃書所合せものなり一巻一巻の明の皇后馬氏の作し
此四部乃書所合せものなり一巻一巻の明の皇后馬氏の作し
此四部乃書所合せものなり一巻一巻の明の皇后馬氏の作し
此四部乃書所合せものなり一巻一巻の明の皇后馬氏の作し
此四部乃書所合せものなり一巻一巻の明の皇后馬氏の作し
此四部乃書所合せものなり一巻一巻の明の皇后馬氏の作し
此四部乃書所合せものなり一巻一巻の明の皇后馬氏の作し

大和小學

二卷

同上

大和小學

朱子の小学篇目

のち

五教

明倫

敬身

立身

のち

五教

明倫

敬身

婦人養草

女子の深窓

のや

か

か

か

か

か

か

か

か

朱子の小学篇目
朱子の小学篇目
朱子の小学篇目
朱子の小学篇目
朱子の小学篇目
朱子の小学篇目
朱子の小学篇目
朱子の小学篇目
朱子の小学篇目
朱子の小学篇目

如去一巻末は忠臣譜略に附く

女子範

二巻

大江資衡

學問大意 女官品階

詩書

歌人名數

和歌法式

賢女孝

婦 女中學者 詩人 文人 歌人 書学

函事

香道

貝蓋

衣服

染色

布帛

器用

琴

双六

雜祭

七夕祭ホの圖

如去一巻 明和五年刊行す

釋書類

日本靈異記 写本

三巻

沙門景戒

此書雄略帝の時より光仁帝の時よりまでの實善惡報
 應のあはれなりとの御書云ふを云ふは昔の作者景戒の考證
 帝の時の人なりといひ侍り。○巻首は日本國現報善惡靈
 異記 諾樂右京藥師寺沙門景戒録と云ふなり。○自序より
 原夫内經外書傳於日本而興始代凡有二時皆自百濟國持
 來之輕島豐明宮御寓舉言田天皇代外書來之磯城島金刺
 宮御宇欽明天皇代内典來也然乃學外之者誅於佛法讀内
 之者輕於外典愚痴之類壞於冥報匪信罪福深智之傳觀於
 内外信因果之於是諾樂藥師寺沙門景戒孰暇世人也才
 好翻行剋利養貪財物過磁石於拳鐵山以噓鐵欲他分惜已
 物甚抗頭於粉粟粒啖糠或貪寺物生犢償或誅法僧現身

寺僧と泰清のくくはる倍好まると云ふ事ありてみよま
くはるのくくはる佛は好まると云ふ事ありてみよま
のくくはるのくくはる佛は好まると云ふ事ありてみよま
のくくはるのくくはる佛は好まると云ふ事ありてみよま
のくくはるのくくはる佛は好まると云ふ事ありてみよま
のくくはるのくくはる佛は好まると云ふ事ありてみよま
のくくはるのくくはる佛は好まると云ふ事ありてみよま
のくくはるのくくはる佛は好まると云ふ事ありてみよま
のくくはるのくくはる佛は好まると云ふ事ありてみよま
のくくはるのくくはる佛は好まると云ふ事ありてみよま

宝物集 略本

三卷

元弘の隱逸傳の海すくくらの刊のなかから一別と添板と中
の片をぬくをせり同略かなり

撰集抄

九卷

西行法師

壽永年中西の撰集抄善通寺に於て他より方外の人々其殊
なるものありてあつて江の君のものもあつて今刊本
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて

四十餘冊の撰集抄の序まを部毎にのりてあつて今刊本
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて

撰集抄 光悦本

三卷

沙石集

十卷

無住法師

卷の上下の序まを部毎にのりてあつて今刊本
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて
のりるものもあつて撰字も多し一は人の御余の撰もあつて

つぎつぎとこれに人むねもこあつたがいは石松ひうひてこれに
がく仍くは石集の名作くま 弘安才二林下居士の位 〇才十
巻の奥よ 于時弘安六年中松草年 け物作書好むのり弘安の
其れ未き空の月松松今懐くこれに好むすま 〇刊中
奥のちこ此集行于世尚矣本有廣略條有前後不知孰是也
慶安五年壬辰初復刊行 〇此書作者無住法の八提原景叶の
甥 〇聖國の弟よかり

發心集

三卷 鴨長明

長明入道の後發心集の因縁わづらひては
ちやちや 〇自序云々 〇序の因縁わづらひては
いよ座の右よとけ 〇序の因縁わづらひては
こいねふ 〇序の因縁わづらひては
せん 〇序の因縁わづらひては
菩薩の因縁わづらひては

きん 〇序の因縁わづらひては
かき 〇序の因縁わづらひては
か 〇序の因縁わづらひては
は 〇序の因縁わづらひては
よ 〇序の因縁わづらひては
葉ののせ 〇序の因縁わづらひては

三部假名鈔

七卷 向阿上人

命本願抄上中下 西要抄上下 父子相迎上下
〇跋曰夫向上人者淨花院五代淨土宗楷哲也惠下哀徳宗中貴才
遂若慈旨二經一論之真義述作三部七冊之秘抄顯示易往易行
勸化引接下根下機品彙爰隆堯感得靈要奇瑞上人相
心已諱日是以信仰銘肝安心徹髓依之三部秘抄鑄開板安
置當院云々于時應永己亥之歲林鐘生朔之日圓教佛子
隆堯謹誌 〇首高溪云凡諸宗の知識の假名法語とりよもの八真

名はえよめ人のためは云ふありしものごとく詞はくすす身らの
 きかむのさしやまよひをいおはるすれは縁さそ
 ろなきもらんしゆもさるまじしは真名れ文もなきはれ
 ほの感情はゆめさしやまよひの人のためは云ふさるの
 えまほむるみるごとく今ものなきしとありえたり又まよひ
 おのらち経秘の意とやまよひげしりてさるごとくこれ譯文
 のゆゑに子相面のうち般舟懺の偈ありて即譯せ
 られしことらなる藍よりあく藍よりあくしと云ふさる
 かなし

三部假名抄諺注

七卷

報恩寺湛澄

経の意はさるものごとくはすすまよひは縁さそ
 ともしてはのたかきさるごとくはゆめさるごとく

三部假名抄言釋

二卷

加茂真淵

要解諺注抄のあやまりはさるごとくはゆめさるごとく

ア○洛陽清淨寺院現住敬阿安水二年八月の序云向阿上人三部抄先
 真享の間報恩澄公諺注要解一書撰撰しと此抄假解するの
 文は引義を述べてはゆめさるごとくはゆめさるごとく
 つまじきしゆもさるまじしは真名れ文もなきはれ
 の敬阿の舊文はゆめさるごとくはゆめさるごとく
 とものおの意はゆめさるまじしは真名れ文もなきはれ
 やまよひのさしやまよひの人のためは云ふさるの
 せり○言釋の中要解諺注等も依りてはゆめさるまじしは
 今りの舊事紀の依書から引くはゆめさるまじしは
 の人の古事記日本紀何合せるとして野説私記はゆめさる
 等のかり依りてはゆめさるまじしは真名れ文もなきはれ
 丸秘ありしゆもさるまじしは真名れ文もなきはれ
 ともはゆめさるまじしは真名れ文もなきはれ
 やまよひのさしやまよひの人のためは云ふさるの

多くお茶其れまご堀河院かの時時よりめ伏せも
 了心書抄のしるすたるはたりすてまごしほ人の補注
 するしるす解ふ小西乃歌して引くはたりし其集より
 ず小西のそかりしは世秋のこころ人欲集の内人丸赤人家
 集かたりしはれ伏せし其次の延喜の比すその人乃集
 ハ彼此よりしるめはめく其集河作すものうく中ハ伏せ
 てやうのしるすもまごしるすものうく

叡岳要記

写本

二卷

此書古字多し叡山開基の事

上卷 傳教大師官符ホのり 十六院のり 延暦寺縁起寺

号宣旨 唐土天台山 文殊堂 経藏 神宮寺ホのり

下卷 釋如堂 西塔院 慈惠大師 智證大師 弘法大

師 義真和尚ホのり

談峰縁起便蒙

二卷

沙門光榮

多武峰縁起乃註し漢字以てこれありす全文四十二卷の
 二卷末の鎌足公の年譜に附す譚峰蓮光院の沙門光栄の作
 ○總論より談峰縁起は二本あり古縁起は後鳥羽院の御宇建久年中
 談峰乃僧上法院永海文に撰す其後花園院の御宇文明年中一條
 禅師兼良澁筆土佐光信圖す一説光茂圖す新縁起ハ文章向の如
 筆者ハ寛文中後水尾院の救ふ因て前氏の堂上四十二人の
 畫も亦勅して住吉如慶回愚慶圖す○古縁起本二卷なり
 元禄十三年庚辰寺教命に依り栗田に竹く古縁起の修覆
 二卷に開く四軸より第一章が氏始祖より第六章取魚所
 散るまでが第一軸より第七章蝦夷大臣より第十八章賊悉
 藤原朝臣よりまでが第二軸より第十九章同十九日より
 卷末
 二依り觀覽は備ふ蓋天の例に因り外題ハ近衛右府家憲公

○諺注ハ題の文に作らざりしごとく、出所考へ和歌に作らざりしごとく、
 此歌人の家説に引くは、法華傳の部を至てハ題に就て文
 引くは、來意の書す又毎品に引くは、めまの品の大意との
 ○引書ハ代々の撰集諸家集夫木名寄人の傳すは、歌書の
 伊勢原氏お徳のほ其餘佛書百餘部引くは、○が集の撰者ハ
 つまびらきかゝる注者ハ洛陽隱士坂内山雲子にありて、元祿辛未
 年自跋り、同年四月刻す

釋教題林集

八卷

隨有軒淨惠

經論釋文ハ、於てハ代々撰集家々の集の中より、

- 第一 法華經 一色一香一念不生 二諦 三途 四弘誓願
- 第二 法華經 阿含 方等 般若 金剛經 大日經 其餘種種
- 第三 法華經 阿含 方等 般若 金剛經 大日經 其餘種種
- 第四 法華經 阿含 方等 般若 金剛經 大日經 其餘種種
- 第五 法華經 阿含 方等 般若 金剛經 大日經 其餘種種
- 第六 法華經 阿含 方等 般若 金剛經 大日經 其餘種種
- 第七 法華經 阿含 方等 般若 金剛經 大日經 其餘種種

第八 雜并夢想

種々釋教の、のせり

○元祿ハ、仲夏自序り、引用書目七十餘部と奉

片岡山

五卷

平向長雅

富緒川

二卷

同上

此二書合刻し、世に、聖徳太子の賜の、
 けりもの、片岡山五卷、古今集ハ、代々撰集及、家集三
 玉集、富緒川二卷、ハ、
 了、富緒川二卷、ハ、
 了、元祿ハ、風觀齋長雅の自序あり

兼葉和歌集

三卷

報恩寺湛澄

此四十八巻の、
 の、
 湛澄自跋り

月乃あそび

一卷

法輪坊元説

粟津義圭授心一く寛政四年刊行す古号宗意一と云が

釋教玉林和歌集

四卷一本 先啓

每卷のくめは浄土真宗玉林和歌集と題す代は撰集及び傳記の中より宗門乃意を以て歌を撰選しと云り寛政九年九月洛陽浄林坊釋辨惠漢字の序より同十年の春刊行す○此書の撰者先啓信濃國の人なり序中云ん

管絃類

梁塵思案鈔

二卷 一條兼良公

上卷 神樂 庭燎 阿知女作法 採物歌 大前張 小前張

下卷 催馬樂 律呂

奥に袖中抄引く催馬樂の譜一条左大臣の作と云ふは律呂の歌にさしあはれり○此書乃本名神樂催馬樂注秘鈔と号す○此の抄は後白河院勅撰と云ふは御室書籍目錄に梁塵秘抄二十卷後白河院勅撰と云ふは兼好法師の時々の書に傳へられたるは徒然草に梁塵秘抄の野曲のこゝろと云ふは其書に體たると云ふは彼書今の世に傳へられたるは其書に體たると云ふは梁塵秘抄の神樂催馬樂東遊歌野曲等と云ふは

卷第六 平調曲 三臺鹽 白玉聲 萬歲樂等
 卷第七 大食調曲 散手破陣樂 武昌樂 赤球樂等
 卷第八 雙調曲 春庭樂 柳花苑 黃鐘調曲 小調曲等
 卷第九 盤涉調曲 蘓合香 萬秋樂 秋風樂等
 卷第十 同下

卷第十一 高麗曲上 新鳥蘓 古鳥蘓等
 卷第十二 角調柱次第 箏卷弦口傳事等

○此書第一卷より第十一卷まで八曲調の譜本として、弦の名一三三四五六七八九十斗為中位以とあり。○按ずると三位藤原師長公安元三年二月五日任元内大臣同日叙從一位治承三年十一月十七日解官其後於尾張國出家 甲二同五年三月帰京号妙音院建久三年七月十九日薨 五十五所著有五要録三五要略仁智要録仁智要略一
 五重序 寫本 一卷
 管絃のちて演主の作なりとあり五重ハ毛皮肉骨髓の五

鳴鳳集 寫本 一卷
 作者代ナシ 大唐樂圖 叙名白虎通 説文 潘岳笙譜
 の説 古善吹笙者 渡本朝事 笙箏葉笛 高麗笛調子 琵琶
 和琴 赤琴箏等の調 撥合名 東遊 踏歌名 催馬樂 樂器
 名物 吹笙次第 始習笙事 付物事 十種供養伽陀事
 朗詠事 御遊事 秘事 調子音取等のハ何れもナシ

體源鈔 寫本 二十卷 豊原統秋

豊原の姓ハ字乃旁ニシテ體源ト名づけり。○奥書ニ云豊原
 統秋判之積磔集ト云豊原樂人統秋豊原後四位下ノリノ
 院實隆公の高弟なり風流のよしく隱者なり云々雪玉集ト云統
 秋身ナリナリノ十首ハナリ

〇昔傳拾葉ノ曰人自七十三代之天子松坂川院とやれてそのをねはら
 序父たり此帝諸道の市勤ヲ比れ所のゆく珠ノ管結乃其の
 ろい候し十夫樂道の器其品莫大かり古來樂書其圖候
 らるし其又その由来かりび其候明せり就中近來樂道の
 達者豊原朝臣統秋といひその乱世に於て其の
 免く樂器の來歴候明して一家に傳ふるは松體源抄と名け
 其書よつぎいり候る〇按す紫屋軒宗長記又統秋贈答の
 書翰より又統秋朝臣候悼め和歌十首法華經の題号候以く向の
 首置り候中の中り候る

胡琴教録 写本 二卷

卷之上 教学琵琶 取捨 差柱 換音 諸調子品

十二律調 樂曲 催馬樂 師傳相承等十五條
 卷之下 琵琶彈時用意 晴所作 樂屋琵琶 彈玄上用意
 琵琶宝物 琵琶名所等二十四條
 〇每卷目錄あり毎條裏書白紙裏とありせり孝道云々あり〇裏書
 〇以左近大夫將監中原光氏之秘本令書寫之秘書之間は涼
 之人有其憚仍以女性令書之間僻字等多得其意追可書改
 之 左近少將草名

樂譜要録 写本 十五卷

卷之一より卷之七まで 横笛譜 卷之八より卷之十まで 鳳笙譜
 卷之十一より卷之十三まで 篳篥譜 卷之十四 箏譜 卷之十五 琵琶譜
 〇卷末より後四位下遠江守秦宿祢昌名撰とあり〇裏書より三子保九
 甲辰年春二月淨寫了 同十巳巳年夏六月批校畢 又右之管二
 絃譜依家之傳本選之内有疑者疑曲暫闕之以三方集會議定
 之上可追加者也

琴曲抄

二卷

此書ハ八橋流築紫箏十三組外ノ新曲二組と補ハ一流のよ何ッ付
唱歌の註釋付くとして、ものし巻首は十三組に、箏の圖は
ら、す元禄し亥二月作者の自序は、し、箏の檢校傳の、

上卷 菜落 梅枝 心づくし 天下太平 薄雪 雪のけし

雲乃と 以上七組は表組より

下卷 薄衣 桐壺 須磨 四季曲 扇曲 雲井曲 梅歌 表組

以上十五組し 元禄七年九月の奥書より

換箏雅譜集

三卷

安村檢校改訂のよ何ッし裏表中許等の次第は定めし
上卷 表組 ふさ 梅がえんづくし 天下太平 扇曲 雲乃の
六段の通し

中卷 裏組 雲乃と 扇曲も 桐壺 四季の友 八段のよ

乱輪舌 中許 末のね空之様 四季の富士 雲井

下卷 三曲 四季曲 扇の曲 雲井曲 新組 羽衣若葉 思

川 橋姫 新雲井弄齋 飛燕曲 宝曆四年刻

琴組唱歌集

一卷

安永年中ハ橋流の佳川檢校し、組に補いし、曲は、
表裏中許奥許の次第は、
重島檢校久米園句當相と、
表組 梅がえん 天下太平 心づくし 扇曲 雲乃のよ 表組
附物 七のよ 扇曲の 新組は

裏組 雲乃と 薄衣 相づくし 百千の梅 扇曲 ね乃乃

中許 須磨 扇曲 梅乃のよ 四季の友 同附物 十二段の

奥許三曲 四季扇 雲井 同新曲 吳竹 夕空 八重垣

飛梅 安永六月刻 六卷 山田松黒

此書ハ箏曲の表裏中... 一節の曲の... 大... 六... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十...

卷之一 表 暮 梅枝の... 天下太平 為方 雪辰 六段

卷之二 裏 雲上 為衣 桐つば 八段 乱

卷之三 中許 復磨 明石 未乃ね 空禅 雪井 弄齋 九段 七段

卷之四 奥組 四木子 扇 雲井 五段 齋羽衣 若葉 思川

卷之五 之橋檢校新曲 四木子 富士曲 二長曲 雪月花曲 六玉川

玉... 浮舟 四木子 恋曲

卷之六 奥書 箏 琴 瑟 篳 阮 和琴 等の和漢の證文 喚爪の

シホウ 左右手法の... 十二調 五調子の... 箏制衣作の... 柱爪寸

法の... 秋霧形 松清形 箏寸法の圖 琴基箏袋の圖

四季源氏乙乃曲の... 同唱歌 安永山田松黒自序 同大澤山人漢文の跋あり 謡抄 二十卷

百番の謡の... 作者は... 高砂朝長 井筒鞍馬天狗 百萬鐵輪 兼平芭蕉 道成寺 龍田 善服 女郎花 松風 安宅 昭君 志賀 大原幸 関寺小町 天鼓 誓願寺 頂羽 花筐 浮舟 春日龍神 遊行柳 穢通 東岸居士 富士大鼓 野宮 葵上 白樂天 木曾 熊谷通小町 安産原 道明寺 社若揚貴 紅葉狩 善知鳥 難波 清経 檜垣 小塩 鷗飼 松虫 三井寺 鸚鵡小町 率都婆小町 當麻 玉井 賴政 千手重衡 阿漕 自然居士 羽衣 実盛 小督 善界 班女 矢卓鴨 短冊忠慶 夕顔 俊寛 雪林院 葛城 藤戸 江口 西行櫻 柏崎 老松 通盛 軒端梅 景清 櫻川 三輪 船橋 采女 姨 桑 槿 鷺 鷺 羽 盛久 定家 鶴 土人 靜 蛭 籠大鼓 佛原 錦木 融 養老 八島 源氏 供養 山婆

角田川放生川田村 梅枝殺生石張良 已上百番し
十二卷 加藤盤齋

自序云云たるは... 講釈... 書入... 遺... 院... 十番... あり...
○首卷 大意 たるは... 起... 諺乃字諷の字... 催... の...
申樂の... 申樂と... 能作者目錄の... 書... たり...
ふ乃諷の目錄
高砂 盛久 江口 大東 寺... あ... 老... ね... 東北... 百万... 自...
居士 老... 通盛 今... 重衡 二人 辭 殺生石 已上十五番
法音抄 五卷 惠空和尚

此書二十二番の諺... 洛東向旭山... 權大僧都... 惠空大和尚... 諺... 牙... 録... たり

卷之一 源氏供養 兼平 檜垣 千手 蟻通 卷之二 実盛 軍大鼓
三井寺 率都婆小町 卷之三 自然 居士 志賀 江口 春日 龍神
卷之四 相崎 山海 娑婆 當麻 卷之五 百萬 清経 野宮
東岸 居士 誓願寺 正徳四年五月刻

諺曲拾葉抄 二十卷 惠南
卷首凡例云此諺曲拾葉抄は花咲と世の老河一葉軒大井貞忠撰
... 其切... 老の死... 約... 手... 手... 法...
... 四十餘... 家... 記録... あり... あり... あり...
... の... あり... あり... あり... あり... あり...

前ハ小次郎カ作ノ遊ハ柳ノ中モ付キ入リキニノリテ
下向ケ下ノ臆断ノ中ニ強ク休チテ定人ノカサリ
此花傳書植字ハ一本あり表紙ノ模様カハ嵯峨本ノ類セリ



